頭書古今和歌集嘉鏡

一

本居鈴廼屋翁著述
山崎美成大人頭書

頭書古今和歌集遠境

全八冊

江戸書林　文溪堂丁子屋平兵衛梓

朝澤

古今和歌集遠境

東京帝國大學圖書館藏

ちかごろはやりし記者の多かるなかに
里見に八犬あかぎ者の物語の妙
かわりたるやうなきをも探りの
美風のはしあるがくし跡のすがたに
好色本料るも手くが多の作る哉
本居鈴の屋の翁も言ひて手に
まめやかなり達者みる津てくはりて
たとえばの搭ものされあまりみ見へる

此地ありまて傍み勧詞もなりとて文
咲きなるるいふ吾の津とふみを歴
まいれあたりてはいやなかめの
道いるは拝人の技わふもなれし
とて読書は多くの弱草紫鳥
書をよむはありのまゝ筆をよそ源
無るし　天保の十かるを四とせ
初春の風も神涼え新稿に

はく存して山崎美成しるす

溪園華義書

古今集遠鏡端書

雲のゐる遠き梢も遠鏡てうつせバこゝに見ゆるハわかちぞなき
此書ハ古今集の哥どもを、ことごとく今の世の俗語に訳せる
なり。そもそもこの集ハよゝに物よくしりし人これかれちうさく
どものあまたありて、のこるくまもなきに、今はた
さらにかゝる物せんハいかなるこゝろぞといふに、かの注釈といふすぢハ、たとへバ
いとはるかなる高き山の梢どもの、ありとばかりハ、ほのかに見
ゆれど、その木とだにあやめもわかぬを、その山ちかき里人の。
明暮のつま木のたよりにも、よく見しれるに、さしてかれハと

とひたくむよ。何の木。れは木。もとゞちハ高うゞ。枝のある
やうハゆく〳〵ふむとやうふ。清里ゆ。変やさうむゞどゝ。さるハいろ
ふよく〳〵高うく。いうよつゞさよ。抽〳〵こゝ。音ゆも。入づくの耳
ハゞぎり〳〵あまゞハちく〳〵て。足るめのまさ〳〵。紀よも。拾ふべ
今もあゝざめる。残。世ふ。壹。同ゞねとゝいふ。ある。抽乃あゝ〳〵
さ〳〵。つ〳〵。足るふハゞよ。ゝれきも。おきまゝ。紀まで。こゝ。こゝ
ゝとよゝつゝきく。校さ〳〵の。書きみゞゝき。下。繁の。名。れ
あきゝすきまで。のるゝ。ゝ。叔ふく。足。名。れゝく。彩。なき。巻
のゝ。名。木よ。とよ。かき。ゞぢ。ゝ。れも。ゝ。ゝ。ざる。ざゝ。ふ。足。ゆる

ふゝ〳〵ゞゞや。今。この。壹。き。代の。云。社。繁の。ゝれ。ゝ。抽。源。紀。ゝ。
へを。やす〳〵ちゝ〳〵。手。隙。れ。色。ふ。ゝ。つ。て。足。ふ。ゝ。も。ゝ。ゝ。ゝ。
ちのゞゞねのたゝひよゝゝゝ。ゝ。む。抽。ゝ。ゝ。く。く。此。事。ハ。ゝ。も。
屋。弦。れ。挟。井。ふ。状。ぬ。し。の。ゝ。ゝ。ゝ。く。ゝ。ゝ。ゝ。ひ。ゝ。ゝ。ゝ。れ。ゝ。ゝ。す
ぢゝて。ゞ。じ。めよ。ゝ。ゝ。け。ひ。き。ゝ。く。ハ。ゝ。ゝ。ゝ。抽。ゝ。ゝ。ふ。よ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。く。く。事。ゝ。ゞ。き。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。れ。て。ゝ。ゝ。も。ゝ。た
ゝ。ゞ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。事。ゝ。る。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ふ。ゝ。ゝ。ゞ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
弥。代。ゝ。

さのこ(笑)ゑ(絵)ことやうふ(様)まこと(事)ごろ(頃)はがうもあるべうが(合)を
ど(程)のいと深くまあ(有)るあらざ(荒)しはみくあし山の弥と
ま(真)ふさくこ(苔)すべくもあらぬ(ば)くふむ。
○うひまがびふぐ(福)のたあよはちうさくもいつさこもしまと
ときたるも。拙れあぢ(味)をひと(人)甘しぬ(笑)
くくむやうふく(様)何のいきをひてふをそれはくきおどこ
まうある(有)蕎麦(そば)よいくうてハ拙たくうふハそあるねばその事を
今あのがんふやふがどもさこえがさきねあるをさとび
どくよ(酔)しくふたぐふくうさおりふふひとしやて拙

の味(あじ)をつくくあ(有)るあくあれるおくいふしへの雅(みやび)言(こと)ふ。
おのがさくくの門は拙くうだ(出)こまりあるくんた
へ乃およれくたくくうえくくることを書きぞくく。
○俗言(サトビゴト)いの國(イヒ)あれ里(リト)とことあることをおもきが中ふハ。ゆび
とふちくきもあれくも。明さよあるくあるのあとをくあま
ねをくよをもよハくくくがくくをぞくくくこふくう男ひくく
しくくくハ京わくくの何しくくうつすべきうきあり。たく
しくあれあがこくすべきハあくあるまがくし。
○俗言(サトビゴト)ふも。志あぐくのあくあ中ふ。あまくいやしき。又たくれ

すぎたる。又時これいまあき洞あどハたゞ〳〵で。又こゝろ〳〵
くゆく〳〵つけそいふこゝろちとけくるとゐたゞひあらを。ハ
ことふゐふ情のあるやゝれおこゝゐ。あゞあいでゝるあおれを。
そのうちとけくる相して。強すべきこゝろちとけくるたんの
まゝふいひ出さるおよてこゝやびとゐいきゐひよ今すこ
しよくあゝれゞぞゝ又男れよを生まゝふの弱をことふ
うちとゝ〳〵ゝるとの多くゝんよゐふすぢけふとわゝハ
あゝるのの出ゞこゝ男れいきゐひおよくゝふつること多ゝ生
ゞをゝふかきたゝるとゝつふゞきたゝり。又いちをこゝゝを

足をも用おゞしたとゝゞおのゞとをゝゝ多ハゝゝく
〳〵いゝとゝちゞきくゝつねふロタシとゐロシとゐのロシハと
いふつきをロキそれハをスレヤすをハをスレヤとゝいふとゝいきを
そのやうゝこのやゝれをシンテコシテとゝいひあゞゞゞゞ城者て
ナラタラさゝうゝてをソレテよゝらゝゝをヨカロこゝゝうよいあゝゞ
ひことふうちとけくるとゐるを。これをくいきゐひふゐゝゞひ
てハおゝゝゝゆゝゝ。ゝいふゝゝぢゝゝあゝゝゝ皮ゐゝふ
ゝおゝをれゞゐ。

○すゞゝ人の德ハ同ゞゝいゐをもいひゞ義いきゐひふゐゝゞ

ひて、深くも浅くもとりくもうれたくも笑ゆるこぎふく、
哥ハことふんのあるやうをぐでようち出たる新あるゆかるふそ
の詞はのいひざゆいきをひハ〜もあぐふ耳よきこころでハことき
がくるまゝバ詞のやうとよくあぢひくよく人の人をおしそ
うくえて、そのいきをひと待すべきあり、たとへば「春されば野
べはあづさゝ云ことゝ」るやどうの詞のもてふへくくと、
笑ふ声をそへるおど、さるふおのが今はたもふれまハあら
ず、世下向はあるまゝ〜ゆる詞あることをさとさむらくぞ
かゝふ歌をふそへざまバたそふまゝの書へあるよしの
あゝされどくれだあり、うるぐひいろくあゝ、な
ずゝくくさとるべし。

○ゝやびどハ、二つゆを三つゆも含たることを、さとび言よ
ハ、合せゝ一ッゆのふあり、又雅言ゆ一つゆるが、さとびでゆて
ゆ、二つ三つよりられるもあるゆ名ふひとつ俗云をこれ
ゆをうもるゆあるゝとあり、又一つ云れ深語のゝとかゝ
ゆ、黒ゆるゝもあるゆ外り。

○ゆゆさゝくあつべき俗云れゆあき詞よハ一つよ二ッ三ッを法
らねてうつ尺とあり、又ハ上下の語れ深れ中ゆゝの言を

こゝろとこそあなれ。何ろハ二句三句を合(ガツセ)て。そのすぢにくれ
ことゞりて訳(ウツ)すもあり。そはそらくへバやすらかなれど。さらにやハあ
ら歌播哥などもこれあと此ゝバといふ詞など一(ヒト)つまちゝる。
いふもうつすべき俗言此なきハ二句を合(アハ)せて。トテモ此ヤ
ウニ早(ハヤ)ウ散(チル)クラヰナラバ一向ニ初メカラサカヌガヨイニナゼサカズニハ井ヌ
ゾと訳せるがごとし。
○表(ウハ)ふよりく。むかしの語(コトバ)れつゞきざまにてふをそなへてむかし
ハしですべりしのこゝをそへて訳(ウツ)すべきあり。もとの詞(コトバ)つゞきてふ
をそなどをさしおきて。ハらくりよし一うされにまゆすらく

なるをもあれぞえ。なほたとへバこぞとやいはむことしとやいはむな
ど。詞をそのまゝとらバ去年(コゾ)ト云ハウカ今年(コトシ)ト訳すべきなれ
ども。さて八俗言(サトビゴト)の例(レイ)にかなはず。去年ト云タモノデアラウカ今年ト
云タモノデアラウカ。とうつすぞよくあたれる。又春きにけりとをた
ゞにうつしなバ。春ノキタコヲ云ると訳(ウツ)されバおさりがたし。
来ると来(キ)たとそたがひあれども。此言などの来(ク)るハ来(キ)ぬると
あるべきことあるを。さいひがたき歌ゆゑ。それをふえるなれバ。そ
のこゝろをえて。キタと訳(ウツ)すべきる。うるさびいとおほしな
ずらへしさとるべし。

○詞をうてうすべきあり。第と見えてこれを見て八俗云
まふ人くとそいなぎれば花ヂヤト思フテと詠すべき。
こゝ人よあどの數はこゝふるまを。俗云よハこゝふるとハいはぬべ
イフとゆへ。雅義ヲレテ居ルトイヘと詠すべし。又てふを八球うへ
て詠すべきもあり。来八春よりうあどのたりどハ春ガキタワ
イとガようふ此影多〳〵。又てふをを詠べきもあり。第咲と
ろうあどハ巻ガ咲タワイとガをふこの影ハをふ和〳〵すべ
き俗云ハガといふとの多きゝ雅云のぞとも多くハガと云
里。巻あど紀里あどハ花チイ里とゝをふ又ちぶきく詠すべ

きもあり。人〳〵あるまぬ。れ〳〵をもうむあどの。あり〳〵をも
じゝあど。詠云球あてこゝふ。ろ〳〵ふ。ろ〳〵。
○詞のこゝろをおきうへくうつすべきとおゝ〳〵あゝとやる
く山影ゆあどハ影云球上へうつ〳〵て。郭公ハ殘リオホウ思フ
テアヽヤウニ鳴クカと詠〳〵きハ人よてら月新ヤヨル〳〵
デ見ヨトテ月ノ影ガテラスとうつ〳〵ちぶきふ拍をやふこゝろが
のこゝぶハこゝろを上ようつ〳〵て。コヽゴロハイロ〳〵ト物思ヒノレヒノイ
フカナと詠〳〵うさぶ〳〵タも見えこゝるうるハこゝるを上
へうつ〳〵て見ワタレタトコロガキツウ〳〵ア物サビレウ見ユルフカナと

俳すたがひまく。これ雅言と俗言とふふやうのたがひあり。
又てふをたをこころをうへく俳すべきあり。「めのうかる者ふ
学ぶ者ぞ」などもれうるねよぞと。ぞりぐハ上ふあるべき
をあれども。さハいひがきなふ。学の下よおるる者ハ。それ
んをえく俳すべ。此俳多く時あすくべ。
○てふをたの事。ぞりくハ俳すべき詞ふ。たとへハ「笠ぞ昔
の香よふ」ひるのごとき。殊よ加を入るべ。れる歌。俗言よハ
笠ガとひく。それ和よちくをもていきあひよく。雅語
のぞれをは賞するとあるを。ある時よいふいきほひハ和よハ
書とくべくもあくべされず。今ハサとふ辞を添へく。ぞよあ
て。花ガサ昔ノ云と俳す。ぞとびの俳こそ多然り。○こそハつひ
ぞ面ちくこ二つある中小花こそちく発ぎ入れめやをぞや
うふ。むくく。いふとのあくハさもびおとも同ぐく。こそといい
て。今一つ山風よこそこぐるべ。あれ雪とのくこそ死ハちる
らあ。あどのたがひのこそハうのすべき詞ふ。これハぞよ
いくちるれバぞの俳よ。あれり。山風まぞ云。雪とのくぞ云。
といひくくむよ。いくぞ。れこびもあくべされバぞ。さくを云
ひくいさくのハぞちをもこるとすれバ。あり。あうとく

あるとこんたぶ袖ふれ〜やどの梅ぞかを。「コト」色。するる。外と
れさぐひのもり〜ハヾアと称す。マアハやうこのり社勢れ
ふまぞあるむ。髪ひのやめ〜ハ俗語ハこかがといふ語の
つぎたるあくふあるハそのもそへうつ〜くいふ「まや
ときまやあそきとハ春ガ早イノカ花ガオソイカと称すが
ど〜〜。
○んも俗言ふハすぐ〜皆ウとのふ。まんやうんをコウイカ
ウといふ。ふんあんまどのんも同じ。「まやちりけ
んハ花ガチツタデアラウカ。「まやちりあんも花ガチルデアラウ
カと称すこ〜此チツタテアとつふと。チルデといふとのうりを
あてがんとあんこのもぢめとまさるぐ〜さこ又語乃つぐ
きこるるこまあるんも多くハうつ〜ぐこ〜たとこハ同じん
人ハ又よちりあんほどらこんふ称の和どめこぐひ人へつぐ
きほへつこ兄ふ称へつぐきてんも皆あこうふあり此まも。
俗語ふハこぐふ。見ル人ハチツテ後ニチルふ野ノとやうふいひて見
ゆ人ハチルデアラノ後ニチルデアラウふ野ノ。ほどハへもきまばこ。あう
るふ此歌をも。あひ〜〜んあんらんの花を。こ中ふ俗言を
とあ〜ば。義あんほぞハオツケチルデアラウガソノ散タ後ニサ。と

詠しらるゝんゆゑのハサダメテ此ゴロハ萩ノ花カチルデヤラウガ
其野ノとやうよ詠すゞ〜敷れども。猶強ヨさハいそぐれバまろ
ふるゝ〜風ゞとゆゑ〜書ものやすゝん山の梢ヒ
ゆゑ〜。山ザクラハ霞ガカクシテアルデアラウテ。詠してまろ〜又
うのそんん人々ヒよゆゑ見ヤウト思フ人ハとうもハ猶強ふも
かゆつ。雲のさきよゆゑ〜ハうやうもうすゞ〜
○らんの詠ハくまぐあり。書ふの風やさくらんとハ
風カーカステアラウカと詠す。アラウらんふあうカ上のやまあさ
ゆういつれ人まゆうひゆゝん。ゆゞハイツフヒ〜ニ散テ三ミウタ

コトヤラと詠す。やうらんすあゝまつ。人まゝれな岩やさくらん
ゆゝハ人ニシラザヌ花カ咲タカシラヌヤと詠す。カシラヌヤとらんふ
ゆゝ。又上ヨや何ふどつふゝ〜ぶひとハあくてらへと縫ビ
たゝこハドウイフ〜テとつふ翻どをへてうつすゝ。又ふ
板のやあつけ。ゆつ〜ゆゞ〜〜人や嘉〜ゆゝ書のゝ冷ゝんか
どハ人ハ嘉〜イトラ声ヲアゲテヒタスラナリとうつす。二花ハどぢゑ
のらんけ鶯ひを。上へうゝ〜〜やと今せゝ〜やラとのふ〜ヤラ
ハすゝゝちやらんとつふゝ。又ふうゝ〜今ハ左ゆゝや嘶風乃
ゆゝふゝ人のきこえんぶゝ〜ん如どのゝゞひも風ゞく上つう

つ〳〵やと云て、ヤラと雑〳〵て、下句をば、高手トヅレモ支
と、蔵〳〵つけてどぢむこれ〳〵ふらんとうぐるとハ上てよあうて
下ふハあ〳〵ざれぞおを
○ら〳〵ハ、サウナと雑す。サウナハ、さ敷、あ〳〵とらふとあるを、書
俗ニサウとのひるをよぶなり。然をバ言ハ、木の、ら〳〵ら〳〵、お
ま〳〵おもむきふあるを、緯あり。たとへハ、拘ふら〳〵を、物ヲ
思フサウナと雑すぐめき、ら〳〵もサウナも共ヨ。人の、ものを敷
れるを見て、ら〳〵とうるを云あれバ、さ〳〵ついでふいもむ
ハ世ならハ、ら〳〵をたぐ、緯ひの、をきと、雑きとめぐひ

とのこんなるて、ぐ〳〵ハ、ものあるめてよむあるを
ひぐをあり。たとへハ、時雨ハ、時雨ガフルデアラウと、時雨ふ
ふ〳〵ハ、時雨ガフルサウナのごと、此俗言のアラウとサウナとの言
ををひ〳〵、そのたぐひあるをとるきまふ〳〵
○かな、哉ハさとびどふとカナとの、言のつぐきぐ敷ハ、雅言云
ハ、まるまてハ、ふときぐ多ハれバ、つぐけるを、言をバ、下上よおきく
ら〳〵あるを云をとをんあどもし〳〵、雑すぐ〳〵、すぐく、此言ハ、
歌意の、句ふ〳〵、心をふるあたるとおるをバ、雑よハそのふ
くるんこゝをこの、句をとも、をちふぐきるぐ外り。

○清くの海ハ多くあり。又雪ハかりつくあど。いひすてくと
ぢめくく。上へくくざるハテと。詠しくくはふくめたくこの詞
とくくふいひすてくるつくハ。必下ハ山をあくる事なれども
その海くめたる事ハ一首の新まて考くる。
○ろくるくれハワイと詠す。雪ハ春よりくを。春ガキタワイ
とつくるぐでし。まくこそれ結びふる。ワイをくくくうすこ
とあり。強のきれざるあくくふある久家久美ハ。とよ詠ぜ
○ありあるあれハチヤと詠す。チヤハデアルのつゞまりてル
乃ちぶりたくもさる布ふ来の来くふくもダといひ。分

里とくくあありのつゞまりたくあれバ。俗云ハチヤダとも
ミニつ云あり。又一つ考くれハ疑くくあり。人まり虫の声すれ
りあどの鳥ハあり。あくくあくくと鳴くこれくまり久多て
いふ何ぞれぞこれハアレ鳴ガカ（ルワアレ松虫声ガスルワ）ぞ詠
すぐ。此ありハチヤと詠す。ありとハ別よて。俗のつゞけざる
もうハれくチヤとくくく方ハつゞく。何くくけ。此ありハ切く
何くくくくるさぶまりあり。
○ぬぬふつくくくくハきを考ど。既よ鳴くくをいふ。辯ハ。
俗云ハ皆町表ぐくタくいふ。ありぬありあるどバナッタ来つ来

つゞるをバ、キタ、なえたるをバ、ミタ、あつきありしをバ、アツタと
いふがごとし。タるそタルのルをはぶけるなり。
あはれをアハレと訴(ウツ)ちるに、まよしたとへバ、何れのかたりあはれ
いくよのやくあれやと、何こ年ニナル家(イヘ)ヂヤ、ジヤア、ハレキツウ荒(アレ)タ
ワイと訴(ウツ)せる歎あり、かく訴するハ、あはれハもと歎息(ナゲク)に忍ふ
てすなはち今世の人の歎息(ナゲト)てア、ヨイ月ヂヤ、ア、シライフヂ
ヤ、又ハレ見事ナ花ヂヤ、ハレヨイ子ヂヤなどいふ声のア、とハレと
をつらねていふ辞なれバ、あはれ、あはれてふことをおもしろやら
じしや、云しハ、花を見る人の、ア、ハレ見事ナといふその詞とお
なじの様へもうじなし、あはれてふことこそうつて世(ヨ)の中(ナカ)を云る
も、アヽハレオイーレヤト人ノ云テクレル詞(コトバ)ヲ云なり、大かたこれらふ
くみ給べしさて、それより移(ウツ)りてハ、何事のふ出れ、アヽハレと
歎息(ナゲ)かるゝことのなきをなりて、あはれなりともあはれをも志
るしらぬなどもいさゝかくひろくつかふ、そのうくひれおハ、き
ハアヽハレと思なるゝことをさしていつるなれバ、俗云ナレ、たゞふ
アヽハレとハいはず、そハ又その思(オモ)ふるすぢふなるひて、別(コト)子
俗云(サトシコトバ)あるなり。
○すべて何事のうまれ、あはれなることふきそ、アレ或ハアヽヤ

ウニ又ソノヤウニあるといひ。これらあるとよハコレ或ハ此ヤウニ
あるいふ詞を添て解セもおわきハその事ハおゆむきを
さぐるふせんらくあり。
○扨ふよやうく。その詞をうつしたる。又扨の縁の詞ハよ
ぐ。すづく詞のうつよまもる類ハ雅言と俗言とハこと
ごとまれバくごよハ雅しめくし。さる類ハ俗言ハうへあくもこ
ろうり変ぜべきさ多ふ云をとくて解セり。
○扨詞序ごとハ。ふの手ふあづる色るとあきハずて解さ
ず。こまと解くハ事ハハやすりてあり。ふまぶくハ
見れバあり。ふる言の類ハ類ハるすぐあるをバその類ハ云
たぐひく解す。
○此ふくしの書るやう。解語のかぎりハ片假字をもちふ假
字づひとる正さぐ仮ハきまりセくり。解のくさハよ。
をり。平假字しそちのさく書るとあるハその言ハ中
の詞あるを。てハ此詞ハあくれりとのふとを指くふ
言あセるこ歌のりハその句と言ハくこ又かくへふ長
くを経くも筋を引たるもの言ハあき詞ある歌をて
いくるふのあるもあるこそくさも多く詞をそくるも

あくすぐ〜あがハ世すぎ世をすぐしひとすぢごとうぎり仕
あまとバ今も著もあるよハすぢべいつべき何乃んなのこれ
るもおわるとバ天をさだめうこえく。おきあべく。又さふ
そへて。たすけもすぐく。又うひやまびのどるがうあどの
あよ。それおもむきをさ〜うまもせむさくん。一二三三。あ六
上 あどあるせるハ枕詞序あど。序をちぶるところをしめ
せるなり。但〜ひさかたあ〜びきあど。人のよく掛詞と知り
たる。世をるーをたぐるり。一三三八句はついで。上八ろこの句と。
○うつ〜詰の歌りまつぎく。ひくぶるして書きとあるも。

序の及びぐさ〜たく〜ハぶるを。歌すけく〜いること。又さこで
もいまあ〜きとどもいさこうつぐいるあり。
○大ぐくいあへの歌と。今は世乃俗徳ようすきぢよ法
きく〜ハ接いきあ〜紀とぐも。いく多ゐまで。さのくくさ
ルれバ。あず〜くくも歌りねと。こかこそ〜て今ハとぐあるこ
かまいさろいとあくあり。又々さぐあたるすぐくの俗も
の中ふた。れあよく孝ゐバいまきちよくあくれるとぐも。
いでくゐ矢まで。いとあいまて。世事ものくハ元きく〜もあ
づ〜ふで。あど一日くう名ひよれるまあ〜抽〜つるも。あよく

又ものしらん人ぞやまさまざまをゝむらもあらぶ
くさ人もはぶきをゝのゝためもしゝよう

本居宣長

やまとうゝハ人ノ心ヲたねとしてよろづのことゝそなはりたる

○哥ト云物ハ人ノ心ガタネニナッテ イロ〳〵ノ詞ニサナッタモノ

チヤワイ

世中ニある人ことゝしてなにかぞきりのあまたのこと
をふれ出るなり

○世中ニカウレテ居ル人ト云モノハ イロ〳〵ト事ノ多イモノ

チヤニヨッテ ソノナニヤカヤノ事ニツケテ 心ニ思フコトヲ

やまとうゝハ本朝の国のことゝ代々の天子
皇都とゝ国一ことゝ
まゝ〳〵ハ日本のことゝなるなり
ぬよりてゝハ日本
のことゝなるなり

ソノ時見ル物ヤ聞クモノニツケテ　云ヒダシタノヂヤ

○花枝ヘキテ鳴ク鶯ヤ　水ニスンデアル蛙ヤナドノ声ヲキケバ　ソレ〳〵ニ面白イトコロハ皆哥ヂヤ　スレヤ生テアルホドノモノハ　何カ哥ヲヨマヌソ　鳥類畜ル并ニデ皆メヅラシヲレ〳〵ノ哥ヲヨム事ヤワイノ

ちゝとゝのまぶ〳〵あめつちとゝとゝごゝ〳〵めふるぬあるれとゝハセ男女のゝとゝもや

ゝ時ハ世〳〵も分も常あるとゝ雄男て皇の四こゝろ〳〵けゝ〳〵くよるをこゝろそ松ハ

ゝ〳〵と日か紀ゝ〳〵ゝ彩ゝ

ゝれゝハゝの姿をゝるゝ

ゝゝげたけきめのふ乃こゝろをゝとゝるゝをゝむ

ゝハゝのゝ

○チカラモ入レズニ天地ヲウゴカシタリ　目ニ見エヌ鬼ヤ神ヲ感ジサセタリ　男ト女トノアヒダヲ　ムツマシウナルヤウニシタリ　アラクマシイ武士心ヲヤハラゲタリナドスルモノハ　哥ヂヤ

このゝあめつちはひゝノルをゝどゝあゝりゝゝ射ゝりゝい

でゝきゝふゝりゝ

○サテ此　哥ノ五モノハ　天地ハジメツタ時カラデケタワイ

[illegible]ハ此ノ[illegible]ハ九
天ノ[illegible]ノ[illegible]四[illegible]
山ノ[illegible]
[illegible]人ノ[illegible]
[illegible]ノ[illegible]
[illegible]ノ[illegible]女神
男神ト[illegible]
[illegible]夫婦ノ[illegible]
[illegible]ハ[illegible]
[illegible]ノ[illegible]
[illegible]ハ[illegible]
[illegible]ノ[illegible]
[illegible]ノ[illegible]
[illegible]ノ[illegible]

えびす[illegible]ハ日本紀ノ[illegible]ノ[illegible]を夫曲と書ていもぶ[illegible]と訓むそれ[illegible]ら人の夫ハえびすともよむ[illegible]ひあやまり[illegible]

あまのうきはしにたちてあめ神を神とあ
[illegible]ることをいへるなり

○ソレハカノ伊弉諾伊弉冊ガ天ノ浮橋ノ下デ御夫婦ノ神ニオナリナサレタ事ノオヨミナサレタ哥ノ事デヤ

[illegible]ハ[illegible]ハひさ[illegible]ことハ[illegible]ハ[illegible]

○サウデヤケレド シツカリト哥トシテ世中ニツタハツテキタノハ ひさかたの 天デハ下照姫ト云神カラハジマリ

[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]

[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]

○下照姫ト云神ハ天若彦ト云タ神ノ[illegible]内ニヤウデアウタソノ哥ト云ハ下照姫ノ兄ゴガ殊ノ外ウツタヘイ神デ ソノ身ノ光リガ ソコラノ間ヤ谷ヘウツテ照リカヾイタヿヲヨンダエビスト云ガアルガ其事デアラウ コレラハ文字ノ数ナドモ定ツタヿモナウテ あノヤウデモナイコトニモデヤ

あゝなのつちふそハすきれをのそようぞおこりる

○ あゝなの 此國土デハ素盞嗚尊カラサハジメツタワイ
ちはやぶる 渭神代ハあのことばゝるさぐまゝすれ
ハあゝてあとのこゝろをきゞさかりゝゝ

○ ちはやぶる 神代ノ時分ニハ哥ノ文字ノ數モ三ダ定メツタ
モナシ コトノホカ古風ナ一デ ドウ云フヨウダモノヤ
ラソノ哥ノ心ガ今見テハワカリニクイ一デアツタサウナ
人の代とありてすきれをのことよりぞこゝろ
あまりひとをゞゝゝ

こい素盞嗚尊のそゝのめて三十二文字
よりまゝしまよゝ
人の世とありてぞ
それよりゝひてよ
ひとゝとゝ一句を
書きそいひろつ
句を上下まおき
ゝゝゝゝゝゝ文の
一行ありゝゝゝ
この行を隔句と
てまよおゝ

八雲の哥ここニハ八
の字假ってゐる
よりゝひあやま
アそこりのそやく
もハ雲の字を

○ サテ人代テツテカラ カノ素盞嗚尊カラ始メツ
タ哥イトホリニ 此一字ニサヨムニハナツタワイ
すきのとはこゝとハあまてるおゝん神のこのゝ
ゝゝ女とすゝ弟ハはとそいづもれをよゝゝ
ゝゝしゝハ財ふそのところはやゝのゝ
のたゝりをゝゝよくゝゝゝ

○ スサノヲノ尊ハ 天照大神ノ御兄ゴ孫ヂヤ シテゝゝ
トニハ 女ト一所ニ住ナサレウトテ 出雲國ヘ御殿ヲ
オタテナサル 時ニソノアタリヘハ色ノ雲ガ立ツタヲ御覽ナ

ゆへなり八重がき
も八重の雲の垣
なりされば稲田姫
をあやまりて
こもくれ(?)ぞまさる
にあり

めでいはあめつち
と云ふ初なり、あはれ

サレテ オヨミナサレタ歌ノコトヂヤヤ

八雲たつ出雲八重垣つまごめに八重垣つくる

その八重垣を

○一アレイクヘモ雲ガタツタ 二アノ出(イヅ)ル雲ノ八重垣(ヤヘガキ)ワイノ 三吾(ワガ)
妻(ツマ)ヲ入(イ)レル宮(ミヤ)ノタメニ アレ雲ガ八重(ヘ)垣ヲ作(ツク)ッタ 五アノ八重
垣ワイノ

いづくはいでくもとでくづきりてつゞきあることを
玉の名は八あるへし
うくてぞ花をめでゝ鳥(トリ)をうらやみ霞(カスミ)をあはれひ

びはあしくあげく
よ言をとなへく(?)
なるもかなしむにも
みなよろこびに
よろしむすと云

千里の道も一歩より
出で山も麓より
なると云語文(?)によ
りそうれるより
ろ(?)のとその旅は
あなよ(?)深き八言
くも広くもなり
なり

露をかなしむこゝろをばおもひくさぐさのことに
なる

○サウシテサ 花ヲ賞翫(シヤウクワン)シタリ 鳥(トリ)ヲウラヤンダリ 霞(カスミ)
ヲ感(カン)ジタリ 露(ツユ)ヲ愛(アイ)シタリ スルヤウナ心詞(コトバ)ガオホウサマ
ザマニナッタモノヂヤワイ

こゝろもいでくるあしかとよりもしおもて
年月をへるまゝに山もかはりてちりひぢよりなれ
あまくあま雲(クモ)たな引(ヒク)まくおひのぼるごとくま
この歌もかくのごとくなるべし

ちなどとハいふて、
新の事ヲあて、何
て皇の新を案
のすめらみことの
ちなどとハいふ

この注もあやまれ
ヲすでに父天
皇と宇治のミこを
皇太子ヨリ立おち

ちなへハ東こ天を立
ホ雄ヲハとハこまし
じきとこて皇の
宮をきをつ
あひこまて百ヲ
ヲ花ガ咲ぶりなる
と歌史ヨリ見
世ハヲ世ハ
まつちなハて
ホいまひて
きここの歌を
ありとこの中ほの
注をいふハホの
花とハ梅ホの歌
をいふ

○キツウ遠イ所デモ タツタ一足フミダス 足モトカラ始テ
ツテ イノ月モ何年モカヽルホドノ所ニデモユキ 又キウ
ウなイ山デモフモトノチリホコリホドノ土カラ始ヽツモ
ツテ 世ノタヒビクホド高ウナルヤウナ物デ 此ヲモシイト
ホリナ物デアラウ
難波津のうさハらどのおゐんはじめ歌
○サテ 難波津ノ歌ハ天子ノ仏事ヲヨンダ歌ノハジメヂヤ
大さゝき乃ゝどの乃ゝよゝづまそこゝと世ゝ
乃ゝ射来宮とゝぶひまづやゝくゝゝゐり

○難波津ノ歌ト云ハ 仁徳天皇ノ難波津ニ住ナサレ
テ 皇子ト申シタ時ニ東宮宇治ノ若郎子ト乃
ダガヒニユヅリアフテ 御位ニ乃ツキナサレイデノ三年ニ
ナツタニヨツテ 王仁ト云タ人ガ一チカ子テレンキニ乃フ
テ仁徳天皇ヘヨンデ上タ寄ヂヤ 其歌ニ冬ノ花トヨ
ンダハ 梅ノ花ヲ云タデアラフ

つまゐそで三年ホ冬ヨ春ハ王化ニ
人のゝぶゝ乃ひゝくゝよゝそたゝくまつゝけ
ゐゝ乃ゐりこの歌ハ梅乃花をいふ歌ヂ

つぶと〳〵子須賀ノ直見ゲひろうて。糸宮をハ
糸宮とを。字しあやまるゝ。とを。と似ゝう。
のきゝ山のとれたゝらねへのたゝらふまをよりまきて

○アサカ山ノ奇ハ奥州ノ采女ノタハムレカラヨミタ奇デ
うつゝきのおゝきくをこちのおくへ流ハしと
里々ゝ射ふ国のつきとゝ知ろそ知りとゝ
まうけ申ゞしゝう品ゞすゝ申すしがりけ
れぞうねへなりうゝ女乃ろゝけろうてあ
ろ知りこれまぞおれきしのんどゝよゝる

田伏ゝろし田とゝ
ろちて恨ゝしゝる
ゝのゝ申ゞ子の程
申ゞよてゞゝ
ゝひゝん

ゝゝ二奇ゝゝる
世よめぞゝき切
ある奇あゝ奇ふ
つふ〳〵へ妻申ふ
ゝゞゝよゝゞ書
てあゝゝろゝ変
ゝあゝゝ

此青山ゝゞゝえ
ゝる山の井北あゝ
ゝゝ人を我公ゝ
ふ
山の井ハあゝきゝ
あれバこゝあゝ
此青山ハ陸奥ふ
ありゝゝゝゝ
ゝよてゝゝゝ
ゝゝゝゝ世ハ必
上ゝゝゝゝ
ゝふ〳〵へハゝゝ
ゝゝゝゝゝ
ゝの葛城王ハ現

○コレハ葛城王トヽヲハ用デ奥州ヘツカハサレタ時ニ
國ノ守ナドガ馳走ナニタテレ尼アシラヒガ穢未ナ
トテ葛城王ガキツウフケウニ名ハレタ時ニ其國ノ
采女デアツタ女ガ盃ヲ持テ出デヨンダ奇ヂヤトコ
ロガ此奇デサ葛城王ノキゲンガナホツタワイ
此ゝゝ奇ハ奇の父母けやうゝゝゝ子ゝゝ人
のゝゝめゝもゝゝゝゝ

○此ナニハヅトアサカ山トニ首ノ奇ハ奇ノニノ親ハノ親ノ
ヤウデサ子供ノ手習ノ始メニモヒヅ是ヲナラウコ

詩の心美事ハ
ナレドソレトモ
ラヌヨウニゾ思フ又
ル八上手の業ハ
キ所ノ〻ナレドモ
ヨアゲル八原の
心美ヲ主ニ義ヲ
ムルゾ

トヂヤワイ

そもく〻この梅むめ
るべき

○サテ〻ツ〻ニ六ノ口ガアルギヤ　唐ノ詩ニモ大カタ此
六ツノ口ガアルデアラウ

そのむかされひとつまハそへうとおもはさきのこころ
ど枝をへ来れる事

○ソノ六イロト云ハ六ソヘ事　カノ仁德天皇ヲオヨソヘ
ヤシ多事

おもはづ咲やこの花
やこのさく

○難波津ニサクコノ花ガ　三　サアモウハ春サキギヤト云
ニサクコノ花ガ

こいつるあるべし

○トヱヤウナガサウデアラウ

ふるゆきをうつ
咲花よ花ひつく枝のあぢきなき所ハいろきのい
るも考べし

お不きさきのこころ
どのふこの歌はで
ニ孔又雅を一人乃
ほるべしとされを
ほよか又ままま
きくハヤしものよ
ニ孔も大字ようく
いうろ〻

宇方後ニ字まづ
の歌ハこの心ニ
今浪花たるう
人のそやくこの

詞を引そへくるまで
うゝうゝびゝうゝ
とよこ者ん とのゝ
いぶゝゝきゝ 花
者ひゝふゝ 日本紀
紀年高の
て
白
はゝ
のよこ
あゝん

○咲テアル花ニ ウツカリト心ヒ入テ居ル者ノサテモイラザルヿワイノ 身ニ心労ナコトノデケテクルモシラズニサ
と云る なる者ゝ
これもこゝぶとふいひく拍子ことゝふゞこもやあ
ゆれ ゆり 此 あいふいゝるまろあゝむるれこ
ころえゞゝいゝまゝゞと者といゝらあゝ
五ゝまハゝゝゞ
○此カゾヘ者ト云ハ ソノ事ヲタゞコトニステ 物ニタトヘナド
モセヌモノギヤ ソレニ此咲花ニトト云者ヲカゾヘ者ニ出シ

タハドウ云心ギヤヤラ ガテガイカヌ 五番メノタゞコト
ウタト云所ヘ出シタ奇ガリ 此カゾヘ者ニハ叶フデアラウ
こゝふハ者ゝゝうたた
君ふルゝ者ゝゝおれおまゝくいまバ君ゝゝきゝこゝ
きゝこゝやゝゝゝゝむ
○オニヘガ 別レテ 三 起テイナヒヤツタナラ ワレハ今ラカ
ラ 恋レウ云フタビゴトニ 消ルヤウニ心フテタテルデノガ
ナヤラウ 君ふハ一本 君ゞゝあゝよゝ
ゝゝふ者ゝゝゞ

扨ハ扨ハ
そもやうふいふれりこの方よくゝ考アリとも
見えぬ

○此ナスラ〳〵方ト云ハ　物ニナゾラヘテ　ソノ物ヤウナドニヤ
ウニヨンダヲ云ヂヤガ　此君ニケサト云方ハヨウ叶ウタ
ト見エヌ

多くちめのおやれふたのあめ　ゆりいぶやく
もあるゝ姉よのそばゝく

○養蚕ノ〳〵ユニコモツテアルヤウニ　一　親ノヒザモトニ居テ

外ヘ出又娘ナバ　ドウモエアハイデ　サテモ〳〵モシニキナコカ
やうあるやあまてよハツふふ〳〵ゝむ

○此ヤウナ哥ガ　此ナスラ〳〵方ト云ニハ叶ウデアラウカ
あつよハ義ゝ云ゝ

ゝゝぶ　哀ハあもゝつきゝあり　ゝ雨の淀れまぎこハあゝ
つゝ云ゝこゝを

○タヽヒ海ノ濱ノ砂ノ數ハヨミツクスト云テモ　オノ〳〵ガ哀
ノ〳〵ケイ　数ハヨミツクサレヽイ

こゝをハあもゝ　ゝ　ゝの事未考ケごりめあ法けてん

えび

あゝを陸ハ荒磯海をつゞめくゝふ
あむハ菜ゝも哀ゝりふをのゝず
も考れあさぎ
まゝびこぶゝをい
ちんとて演のまき
ゝゝよゝ入てゝう

うれしきこころもち
きと八清の與り
仰あて、ふよて
う〜須だの聲の
高ハよくうあり

と又すゝ此高ハクれうこころ多むれき
れどえじめのろ人ゝあるじやうるれバ
すゝ義とろてるあ多べ

○此タトへ高ト云ハイロ〳〵草木ヤ鳥ナダモノナドニヨセ
テ心ヲ見セタモノヂヤ ソレニ此ワガ高ハトスル高ハカク
レタ所ガナイ タトへ高ハ物ニタトヘテ云テ アラハニハ云
ハヌヂヤニヨッテ カクレタ所ガナウテハスヽヌ ヂヤケレ共姫ノ
ノヘ高ト云ト月ジヤウナーナレバ スコレモヤウノカハッタ
高ヲ出シタモノデアラウ

すゝのあまけ陰やく煙風をつゝゝ名ぬ
うさふたゝびきゝ

○スヽノ浦ノ海士ガ塩ヲヤク畑ガ風ノハゲシサニ名ヒモヲ
ラヌ方ヘナビーフイタワイ
この高ゝやうあふべうゝむ
此高ナトガ タトへ高ニハ叶ウデモアラウカ
いつゝまゝたゞごとうゝ
いつたうれなきよれノセバつゝぞうゝ人の高ハを
うれしゝゝあり 清

たゞごとゝハおもよ
せべくとのそとあり
のまゝふゝる多を
この高ハかのみぎ
りふゝ直おひ
つゝゝあり

○偽リト云フガナイ世中デアラウナラドレホド人ノ云テ
クレル詞ガウレシカラウヅ
とそるあべ
これいとのとれありさべーきをいふあり
あの者れこそろさそよるかべあらさそや
いつ屋くくすく
○此タベコトあト云ハコトノトノウテタベシイノヲ云ヒヤ
コノイツハリノト云ハ寄ノ心ハ子カラ叶ハヌ此者ハトノ者
ト云物デアラウカ

この歌も詞の雅
れ体と云ふてこ
こての言葉よりあ
そべ正のまをそで
そもよめどこそハ
そのそもよあずず
直の字をそべし
もかかもあむを
のをく

おそそのおハく
をそそそもあれ
ど源ハたをとあ
らでをりしをこ
ろあれバあらべ

いもいむを迎て
言問べ神はつく
ふ物をいふう
つーくすく舟
ハ非常をいふを
で神をいもひ君
といふるども云
形をそれよりう
つーく祝ひのを
ゆもいもをそう

山桜あくまでををそつるあ茶ちらべく
も流るるよよ
○山桜ヲ腹ハイナ分見タサテモアリガタイコカナ影
ノチルクラ井ノアライ風モフカヌ ケツカウナ御代デ井
此ノナドガ タベコトあト云ハ叶ウデアラウカ
むつふるいれひうく
此このハうべもそそりさきくされ清ろむよあるよ
厳づくりせう
○此屋形ハゲニモ古繁昌ナ一ギヤワイ 古殿くノ

ツヅケガ肝ヨト 三 三ツモ四ツモワイテサテ〳〵ケツカウ

ナ世普請ヂヤ

こゝろるあるべし

こゝハ世をあて神ふつゞるこゝろ

たくハ尺くゞなむあふ

○此イハヒ言ト云ハ 此代ヲホメテ 其事ヲ神申スヲ

ヂヤ ソレニキコノ敷ハト云言ハドウモ イハヒ言ト ハ見エ

ヌテイヂヤ

来日神よりふつゝこつ業代といふ〳〵ハ

神ぞあるこゝん

あまやすこゝ多べうむおやよそむ

ふるよりあれすとえあるおゞきこと

ふれむ

○コレラナドノ言ガ イハヒ言ト云ハ スコシ叶ウデモア

ラウカ 一アタイテイ 言ノミナイ 六イロニ今レウ ハ

ドウモサウハワケラレヌイデサゴザル

今のよれあつゝよつき人の心よあり事

るよりあゞあるあるれきとのこゝゞ危バ

これハ人の性を言ひくらぶれるものなり 心の花のごとし人ハこころよりさくべきものなり つくりものの花をもこれハ人の心をもてあそぶれハ人の心をもてあそぶなり

○サテ今ノ世中ハ人心ガ花ノ〳〵シイコトニツイテ ウハキニナ
ツタカラシテ アダナキワトセヌ人バッカリデケルニヨツテ
いろこゝろの人 木の人〳〵まぬ〳〵あく
てあめあ〳〵ゆ〳〵こゝろ よハ色すれそふいぶんぎ
こゝろもあ〳〵ずの形〳〵〳〵
○大切ナ人ガ 色事シノ家ノ [おれの] ナイヨウゴトニ
ナツテ カタイトコロハ [花すき] アラハレテダサレヌヤウニナツ
テシマウタ
そのはじめを切ぐ〳〵ぶ〳〵あ〳〵ぬ

切〳〵ハ花を切くつふまつる人こゝ人をおもせてれあそびあり〳〵

○ホンタイノトコロヲ見レバカウアラウコトデハナイ
古のよ〳〵はこゝろ ゞ来の花けあ〳〵〳〵秋の月の夜ど
ふきふ〳〵姿〳〵と紅〳〵〳〵こゝあつけつ〳〵あを〳〵〳〵
まつ〳〵〳〵めの〳〵
○昔ハ代〳〵ノ天子様ガ 春ノ花ノ時分ヤ秋ノ月夜ナ
ドニ中ニ イツデモ ツメテ居サツシヤル衆ヲ前ヘメ
シテ ナニヲ友シ事ニツイテハ 歌ヲ上ルヤウニ仰付ラレタ
あるハ花をこふとゝく たより形きこゝろ ふまどひ
ゆるる月 城をふとも 去ぶ ゞ子きやこゝよどれら

雪の〳〵ノ人の新 新ナコトヲ中ノ人の 雪ノ人ノ心ヲ ひ及手の 俗雪文

ふくろとも下ハ俗ニ蓮根の
あいまとすくるし
くるいひ業平ハ
情あるうてあるく
そう 西行ハ生涯
のうあり出家し
て法ひふ俗ニ法
のぶりやでめぐり
くき終をこそ
の人の あいまとす
くるし 業平のい
うれもこぶりよお
きすぎる実情も
あまれるわのまい
るハこの人こハもむ
あるところぶきま
のくうえべあるを

いのちぶくろ 蓮根
をうのかてるもの
ゆんてもあるを
きてとこあるも
ふ虫ハ詩あるも
科場をとこられ
を長よりいはい
くうあるを 出義
ゆハ見をぬとも

ふくろを又ひらくさくらあるうとあるうめ
しるむ

○サウシテ或ハ花ヲ見タウ心テ ヨリシキモナイ 野ナ
ドニデ暑子マハツテアルイタリ 或ハ月ニ執心シテ見ニ
行テハ ヒダ出ヌサキヤ 入テシヤウタアトヤナド 廣イノニ
業内モシラヌ所ヲアチラヘコチラヘトシテアルイタリ スル
ヤウナ風流ナ心ニヨ ソノヨンダ歌デ考ヘテ 凡境ナサレ
テ ソノ歌ニヨツテ アレハカシコイモノカド アノ人ハ才ロカナ
者ヂヤトエヲ 少存知ナサレタモヤウカヤ昔ハサ

ふくをこうといふよりやうふくでれうとのいふまぐ
すぐそ 沈清たるうとのうあり あるうまよ
強強これを思あるうこまれるハひがとあるうさ
うおろうあるうをあるうめ思をさくくまえる
高ハさまをりてこそ考へ見るあれ めーこれう
おろうれるうこのあるロぎをセバ今ひとうこ
きすををいまでいとこのそばぐで思あるう
すのこをのひて やはぎまよハあくぎるをや
あるあるあくあくふ海ずさでれ不ぎよとへつくバ山ふ

ゴガ君ハ手ヨリモ
ヨリマセサレ石
ノ上ニオトヲリテ
苔ノ如ケスマデ
つくばねのこのもと
のもるうけハ木れ
ど君ガ心ゴケ深ま
すらげまあ〜

かけろ〜君をねがひ

○サテ又サウガリデナレニ　サゾレ石ニタヽ上人タリ　筑波山ニ
ツケタリシテ君ヲ祈リヤレ
よろこび多ヨすぎたの〜こんぶのまり

○又ハ身ニ過タヨロコビアルトキハ　心ニアヽルホドトオモシロイ
コトノアルトキヤナド
ゆゞしきよろこびよろこびて人をこそ　松ヲの春ヨ友
をしのび

○アルヒハ又富士山ノチカリニヨリテ　人ニ恵ミウタイヲ
ニタリ　松ヲノ声ヲキイテ友ダチヲナツカシウオモタリ
高砂ノ住ノ江ノ松をあひおひのやうふる〜

○キツウ手ガヨツテハ　高砂ヤ住ノ江ノアノ久シイ相追
ナヤウニ心ハレタリスルトキニモヨシ
あひおひハ今の俗語ニ　ものうらとあて追ニ
めとたづひよ進ニ追ルニすゝとより出たること云
ふるくいはるゝ〜のおほもあるく大ら〜閉じ
あるとふいろ〜

ととこ山のむろ〜ぞ　ひいでをこ形〜の一とき
ろ〜つせをやつ
さんちあのこのへ
ふそそらまつふる
るふ
君の江のまつれ
姫松人ふるぶく
代ろ〜ととはは
ものを
ちれそそ久〜
あろぬ住よりも
きつのひめ松く
代人あ〜
そそこ君ちれもむ
う人男山さろく

時もありこそあの
を
秋の野になまめ
きたてる女郎花
あなかしがまし
花もひとゝき

残りなくちるぞめ
でたきさくら花あり
て世の中はての
うければ

秋風にあへずちり
ぬるもみぢばの行
へさだめぬ我ぞ
かなしき

あら玉の年の終
りになるごとに雪

くねるにも哥をいひてぞなぐさめける。

○又年ヨツテハ　男ハヲトコザカリテアツタ昔ノコヲヲ思ヒダ
シ　女ハワカザカリノ早ウスギタヨーヲ愚痴ニクヨクヨト思
ウヤウチ時モミナ哥ヲヨンデサ心ヲハラシタコトヂヤワイ

又春のあしたに花のちるを見て秋の夕ぐれこの葉の
落るをきく

○又春ノコロ朝花ノチリノヲ見タリ秋ノユフガタ木ノ葉ノ
オチル音ヲキイタリ

あるハとしごとにかゞみの影に見ゆる雪と浪とをな

もわが身もふり
まさりつゝ

紀手のそうしもあ
るかひもあらで見
るかげさへ年な
よるなりへバ

長き難波のうら
うらみのあふこのへ
いまやおもれなん
書をそこしやする
ものことばかんじ
歌も草子おもふバ
ろうぞて

水の泡のきえて
うき身といひなが
ら流れてなほも
このまるゝかな
いかへの絲のむ

げき

○或ハ鏡ノ影ニ見エルワガ白髪ヤ面ノシワノ毎年多ク
ナルヲ見テ歎イタリ

草の露水乃あわをみてわが身をおどろき

○草ニ露ヤ水ノ沫ノ手ナルヲ見テ我身モアノトホリヂヤト
云フヲ知テ驚イタリ

あるひハきのふハさかえおごりて時をうしなひ
よにわびしたしかりしもうとくなり

○アルヒハ昨日マデハ繁昌シテ何ニ不足ナコトモナカツタ

者ガ三カニ不仕合セニナツテナンギヲレタリ　又モトレタ
レカツタ中ガ　ソヒンニナツタリシタトキ
ねるハ松山ノ浪をうけ野中乃ゑびをふこ萩薄の
下葉ヲナガメタリ　暁ノ鴫ノ羽根ガキスル數ヲカゾヘタリ
あふさくれ伊のうきふしを人まつひよりれ川をひき
て世の中をうくこきろくを

○或ハ[くれ伊の]身ノウイヲヨ人ニハナレ　吉野川ヲタイヘニ引

○或ハ未ノ松山ノ波ヤ野中ノ清水ヲタトヘニシタリ　萩ノ
ゑだ

ていろ世中ヲ恨ニタリ
きろくと云う河波の文とあひるまぢいろ
くれハふじの山もムラムラあり沢あり谷あり
ありときくく人ハ奇ヨのこそんをあがこさある
○又今デハモウ富士山モ烟ノタヽヌヤウニナリ　長柄ノ橋モ又
アタラレウ出来タト雲ク人ハ別ニテ奇ヨムバツカリデナ
心ヲハラシタコヂヤワイ
つくるを尽ル有ると云る詠ひごとをもり尽されバ
つきあるやうところ人つくるれうとまいなるず　こ

すると
時の世ノ初うきる
もちかき花の
よハ月ハ雲ぞ
よまふれぶとの
ぶき　くれ伊の
ゆ　ゆとまうぶ
ぞ峰
かれていハもの
山の中ふつるよ
しのこ河れすや
よの中
よふ富士のふりよ
ようくこそハそ乃
烟も素ノ有りま
ふるくこれハ地
獄十九年ようの山

五）雅言の必ズ其ノ言ヒ難シ。

いかに〳〵よろづつくしがたきちはやぶる神代よりぞ
ひろまりふるるあやかしんをたろ〳〵
ゆゑ〳〵なむ

○ズット昔カラ右ノ通リ偖ハツテキタウチニモ奈良ノ此時カラサ別ニテヒロヘツタワイ其ノ時代ニハ之メテ書ノ口ヲヨウ存知デアツタモノデガナアラウ

四のおそん時イおそきこのろゝゐゝきのもとれ人
まろあん子のひゞ里ゆりをる

この章も始メ書そへるものゝ考ヘ方ハ之メテ書ノ口ヲヨウ存知デアツタモノデガナアラウ
の書ヨウ存知デアツタモノデガナアラウ
ヨ君位を伴と云ベキ君ノ子ハ人丸の母代
すりて人丸の母代
もたが丸バ云ヘ
ら名と云

○其ノ世ニ正三位柿本ノ人麿ハ奇ノ聖人デサアツタワイ
ある人ハ君を人も彩をあそセころとゆふ形るづ〳〵

○コレハ一コトニ君臣合躰ト云モノデアラウ

妹の門ふべ高川もゆ紅葉をぞころどの山月
中絶〳〵ゆ中ひ来めあ〳〵吉野山の桜ハ人まろか
んよハ雪〳〵とのゝ形んなびらゝる

○秋ノタグレニ立田川ニ流レル紅葉ヲバソノ奈良ノ帝ノ御目ニハ錦ノヤウニ見ユ焼ナサレ春ノ朝吉野山ノ桜ヲバ人麿ノ心ニハ雪カトバツカリサ心ハレダワイ

又山のぐのあり人とうふ人あり乃うあふあやしくこと
あり乃
○又山ゾベ赤人上云人ガアッタロイ　コレモ三ツ三姉ナ名人デアッタ
ロイ
人まろハあり人がかとうもとかくの人ハ人まろ
ぐあもかたくむとうくかきあり乃
○人百ハ赤人上三タツハナリテクカラウシ　赤人ハ人ニロイトヘ
オキニクイクラ弁ナコトデサアッタロイ
あくれこうどの御うく

ゆてうきしいとこ
うこう
本書乃幸の小部
ハ本ヨツ〜ごく〜
又抽の部乃のぐ
の部ハこまよこう人
ちくれと書ま志
るまこれたると同じ
すぐ〜左の注ハ孫
あぐきてこの書
まのこう

蘭川ものこぶれて流るあり　いくこぶ移まろ
やたえるひ
人まろ
抽乃部ぶれとまるぶびはうくれあまぎる書の
ぐ〜ふまてバ
乃のぐとあ〜け酒の新ぎうよ畜うれやく
紙をぐ乃ふ
赤人
赤の部よまこれつうあとて〜紙ぐ部とまつう

ゐさ一よねまる

○春ノ野ヘスミレヲ採ウト名ウテ オレハ未タガ アリノドカデ面白サニ 此野デサ一夜寝タワイ

つろ井海まあわこちられバ切さとみこあ〜どさ

しそこぶ鳴ちる

○若ノ浦ハ赤ガミテクレバ 干潟ガ無サニ 芦原ノ方ヲ指テ

鶴ガ鳴テワタルアレ

この人ことをきて又すぐれる人もこれ外れよこま

きこえくさいとのあり〜ふたえだぞありけふ

いろ人よろよく
よろる人で世おこ
えだとあり

この人ぐうも浦さ
見こふこえぎこま
あ代文のつぐぬ
もて場の志ぼ
あるとしる

○此二人ノ外ニモ又スグレタ人ハ 柿の代々 糸井 時ニタエ

ズサアリタワイ

二五ヒトツヤきの言をあつめくふん美義志う

と多づ久こ五てうける

○サテ此奈良ノ時代デノ事ノトモヲ集メテ萬葉

集トサ頌号ヲツケラレタワイ

こころぶ〜べのと〜ぶ〜高井こころ歌を志ぼふ〜ぺ

づふひとりやうう多あまきき志ろあまでこまつれ

えくるこころうえぬこころぶびまれんなふ

年八百余歳世八十代まであれども八幡殿の御時まで延喜の御時までをくぞかるこ

の御時よりこれをこそ年八百とこそセあれ世ハつゐぎ
ふるむ形りみるる
○其ノ時代カラコナハ年八百年ニ当リ代八十代ニ当ル
ワイ
こゝふいゝハのゑもこれこそ老れる人も
人おゝくずゝぶゝふのひろうふくをゆうきあるハ
まだこれをゝるこゝ孫子ゑもこゝろぐひよるむ
ある
○其間ニ聞ノ中モ多ノ白ケモヨウ知ッタ人ヨシタ人ハ多クサ

ニ三ハナイワガ二人カ二人ト云ホドノ人デアッタ ガヤガシレモ
タガヒニ得タトコロト得ヌトコロガリアッテカノ人磨ヤ赤人
ホトニ上分雑ノチイ名人トハイハレヌ
その此事をのふよりきこゝる高き人をバ名やすきこそ
うれしバいれ
○サテ今其ノ人々ノ云ウ所ヤガ其内ニ官位ノ高イ人
ノ事ハ天ノ慮外ナヤウナ物ナヤニヨッテ其ノ中ニ
その程ふちろきよりよろこれ名まこゝ云ふる人々
○ソノ官位ノ高イ所デハナシニ其外ニ近イ代ニ高ノ名ノ学

エタ流ハ

するハちゆうしゅ通昭ハあれきゑハそれごもすまとすくるゆ
したとえバ老よろろとそれをるくいとぐくふんを
うごかしがごとし

○ゾウ僧正遍昭ハあノテイイ八得テアツメテ年 ヽコトガヘク
ナイ物ニテイハウイラ 絵ニカイテアルオヤヲ見テセ
ツナイト志ヲウゴカスヤウナモノデヤ
はこぶろ糸ようろうをて石ぶをまあもやをそ
ゑやはきろ

ちちす春ふのふごろうしあまあんりて伊ろハつ
ゆとまとあざむく
漢滅殊ふく馬まりおちくあろ
名よ名ぞくおれるちろぞ女子ばろれあち
あまとくんよゆくろ
あるくれ形ろひくもそのごろうあまりてこそ
くんぐ志ぐれる茶乃色をくくあやいのくれる
がごとく

○在原ノ業平ノ高ハコロガアヤツテ 詞タラズ テウー

さらとうぎうみきもや

ニボシガ花ノ色ハナウナジテ 赤ヒノ残ツテヤウナ

月やあらぬ春やむかしの春なれど
ものハものの秋ぞかなしき

大ぞらハ月ぞすみけるおのれ〳〵ニ
おのと形ちもの

袖ふれし秋ぞをハうるこゝぞろ
ふるも形ちまさるか

注 人屋のやすひぐくハどバたそこそそのさきしこうお
ぞいもぐあきくぬきくこんぐこと〳〵

とハ乃ことのうもトの秋どもまれ
えゝ実ま考うそのさまるがよお

ぞ記録の乃
のうこうきふ高
北風ハ年と
ゝノ

袖のうえゝ
ハほ不塩玄徒と
てこ考やまゝ
ずとゝゝきこゝ

○文室康秀ハ詞ハタクミデ この侍カソノ詞ト相応セ
又 イブアキレドノヲイキル物ヲ着タヤウナモノギヤ

吹ゝ不那ハの草木れ志をれバうぐ山風をあ
らとゝあゝむ

海苔(カイ)のこゝぐの声(コウキ)哀よ

菊(カイ)ゝき春(カスミ)の音(クニ)よかげろゝてこ日(ヒ)のこれ

ゝゝふよやハあゝ

宇治山(ウヂヤマ)の僧きもんもとバうゝかゝゝこゝあゝ

更たゝらあゝぐいそぐ秋(アキ)の月と見るゝ不暁(アカツキ)の雲(クモ)

始終たゝうあるべ
とハとのこゝろを
始終考ふるに云
そもてあくこれも対
世あく人を世こと
たゝうあくかそ
はぬわを云とと人
のこもあきくうと

表題の文多く
見くんよりてう
勢るものゝ心で
世二人の対ゝも各
者の対りてうき
ゝとこれゝのと
ありて八文のつき

あくゝるべゝ

○宇治山ノ僧喜撰ハ初ガオクカウテ ハレテ 始メトハテト
ムツリアヒガシカリトセヌ イヅ秋月ヲ見ルニ暁ノ雲ゝ
ノデキタヤウチモノ哉ヤ

つゞ屋ゝやこのゝろゝ考ゝるゝすむ世をうぢ山
と人ハいゝ家ゝり

よあるゝゝおゝく世ゝゝねバ多ゝこれをうよりくゝよく
考ゝゝ

○此人ハヨシダ手ガ多ウハ侍ラヌニヨツテ アヤコレヤヲ見合

又ゝれてきゝるゝ日を
ゝゝ時きゝ
ゝよゝつきく
めゝゝ

あゝれゝゝをゝよ
てとハゝゝゝ対
つゝゝゝぬハすて
いをゝゝろゝと云
云ゝれてゝろゝよ
きをゝゝゝとゝれ
ゝゝくゝゝあゝまの
対ゝくハゝゝハき
不用ひゝゝ

このをのゝゝまち
れ評まゝゝの
云通姫の原子

スコトガナラネバ トイトハシレヌ

をのゝこゝまちハいゝ(の)をゝゝりひめれ流ゝゝあハ
まゝあゝゝやう少ゝゝつゝゝゝずいそゝよき女の形や
めゝゝとゝろあゝゝよ似ゝゝゝつゝゝゝぬハをゝ形のゝ
あゝゝバ形ゝゝべゝ

○小野小町ハ昔ノ衣通姫ノ流ナガギヤ アハヤヤウデ ッ
ヨウナイ イヅエイ女チヤ五所ノアルニ秋タ物ヂヤ ッヨウ
ナイハ女ノ方ユヱデアラウ

ひつゝゝれゝゝや人のゝゝゝゝん者ゝ考ゝ考ゝゝゝバ

[illegible]

その[illegible]の
[illegible]
あんとあるべき
[illegible]

さめざめまを
[illegible]でうろふ和ハよれ中の人乃人の[illegible]よ
ぞあり[illegible]
[illegible]ぬ[illegible]とうき草の根を[illegible]
[illegible]ぶいるむ[illegible]
そ[illegible]ほ[illegible]姫の[illegible]
[illegible]ぎ[illegible]きよひまり[illegible]ぶの[illegible]
まひうねて[illegible]

[illegible]ハ[illegible]

コトバ
[illegible]

その[illegible]ゆ[illegible]いそぐ[illegible]

[illegible]

この[illegible]人おの[illegible]
[illegible]ぬと[illegible]
[illegible]ぐす[illegible]
ハ對[illegible]
て[illegible]

[illegible]人乃
[illegible]ハひ[illegible]

き木おつる山人の[illegible]ぶ[illegible]

○大友黒上ハオモシロイ所ガアッテ　その体ガイヤシイ
イハ、薪ヲ負テ井ルヤ、ガオヤヂガ　花ノ木ノ下デ休ンデ
居ルヤウナテイヂヤ　千秋云訳ハオモシロイトコロガアッテ
[illegible]補[illegible]
[illegible]
[illegible]ひいで[illegible]き附ハ[illegible]の時て[illegible]人
の[illegible]ずや
[illegible]山ハ[illegible]
やしぬ[illegible]

ぞれる葛とげき木をふさぐとうきれどうこと見えてそのあ
ーを浮するまでの人ハすくふ〜とそうすぐ〜のとたくさまてハよー
あーをきぬぐ〜くいとれる人ふくいとれる人のきぬめこう浮ハあるべきものあり

このあられ人〜をれ名きこあるべものふるべ〜
のをひ取ごりそやーふあげきこの葉れぢ〜
よおあられど高らのこあるひ〜をれさぬ者〜ぬ
あるべ〜

○此外ニモ名アル人〜ハ所ニハヒロガツテ葛ヤ林ニシゲ
ウハエテアル木ノ葉ヤドノゴトクニタントアルケレドモ
ナ自分ニ高ノ低ヤトカウテ居ルバカリデ実ニ高ト云モ
ノ、クハシイヤウスヲバ知ラヌモノ計ヤト見エル
ふはいはすべらきのあるのーた者ろーめたと

よめのときこのろうよあむ形ぬる

○サテ右ノ通リデアツタトコロニ御當代上掃矢下ヲ治弁
セラルヽノモ今年デ九年ニサナルカ
あまねきおほんうろ〜これ涙やーまりあるよ
でなぐれひろきおほんめぐこのぐけく八山の
ぬ者ぬろよりも者ぬくおりまく〜

○ドコカラドコニデモモレタ所ノイイ乃慈悲ガ日本ノ
外ニデイキワタツテイツクノウラニデモミナソノ乃蔭ヲ
カウムラヌ者ハナイ雖有イ時節デ

うろ〜うのるこ
八やーまりふよ
よやそこ乃ぬを
天八ぬとふこと
神代紀ようあ

万機をきこしめすあまりよろづのくのうをもすてぬハあまりしるしるあの古をもひろくとりおこしてそのふるとし万葉集の撰れ給ハさるとたえあるをこのゝ家おろしおこして仰とでもあるこしはおこしゝあのてふのいろ〳〵そのをあつめてえらゝむせすふくゝるゆをそをもぶきゝるあめぞ

よろづのまつりごとをきこしめしいとまあるときゝ
をすてたまふことあるふ
○イロ〳〵ノ政事ヲトリ行ハセラルヽノヒマニ其外ノ
切ノ事ニデヲルハステアソバサレヌアリニ
いろ〳〵のことをもわたくしまでかゝはりとゝもおこしゝふ
こゝろ〳〵そもんそおもしろ好ノ世ふをつくこハれとゝく
○古ヘアル多事ヲモハ忘レアソバサルヽイ年久シウナルタ
ヲヲモハ取ヒロアソバサウトニヲ思ヒシデ今モハ後アリ
バサレ又後〳〵ヘモ伝ハレト思召テ

延喜五年四月十八日ふ内記きのとも行ら古書の
どころ所あづりきの所〳〵やきさ所のくひ所さうく
らんあふ〳〵ふちのみつね右馬ノ斎生こふの左ぶ又
ねらふあるせらまて
○當年延喜五年四月十八日ニワレラ四人者ヘ仰付ラレテ
まんえうしまうよいしぬふまきうこうづくのとも
てあつらしめ給ひ〳〵あ今〳〵
○万葉集ニ入ラヌフルイ歌ハ其ノ所ニ自分〳〵ノ名ヲモ集メ
テ差上ヘスルヤウニト仰ヒ付ラレテサ

仰の今の中ふ数
号のゝ五位ふて
その外ハ過良ふ
るぶおのせうく元
るハけきトぶれさ
ヒバ多り

来る歌者の歌より
はじめ春花八月之月
秋夜来れとてくん
八月末の歌山のまの
月を指と歌あり
れば秋のこころぬ
くるぶしの八雲抄より
はじめ夏のおまでの
分をとるべし

それがあるふも梅をとうぶんよりはじめて初こぎ
をきくことをぎをとり雪をとるまいこるまで

○ソノ中ニモ春梅ノ花ヲカザス事カラウツリタツテ郭公ヲ
キク事 紅葉ヲ折ル事 雪ヲ見ル事ニテ正ニ歌ノ
又つくるようよつけて君を恋ひ人をおいそひ

○又雀亀ニツケテ君ノ寿命ヲ長カレト心フテ祝申
シタリ 其外人ヲモ祝フタ事
秋萩夏ふきを又そつまとをひ逢坂ふかいこうて
千歩の命をいのり

○又秋ノ萩ノ花ヤ夏ノ卯ヲ見テ人妻ヲ恋シウ思フタ歌ノ
事 逢坂山ヲデ旅ニテ行テ手向ノ神ヲ祈ル歌ノ
あふ八来る秋の夕あもいくあくまの事をあおそえ
らバセ思ひ

○アルニハ四季恋ドノ歌ニモイロイロノ雑ノ歌ノ中デヨサ
撰ミヽセイト作対ラレテ歌ノ撰ノ集メタ
すづくちくさまきあづけて古今如の集ノ中ふ

○其ノ歌都合千首巻ノ数八廿巻 題号ハ古今和歌集
トイフケタ

この集ハ千百余
社あとえ〳〵ぞ多
しうど文のさま
あ〳〵千歌とあふ
あり

此歌ハ一首ノ意ハ
妻永くつくりし余
るいとひて[illegible]
山下水ハ[illegible]
[illegible]
[illegible]ハ数
[illegible]すハうちそゝぬと
[illegible]石ハ万代
経てかひまさ
んとぞ

うこのふびおつあへゑらバれて山下水のたえず濱
すまさごのかずおほく流れりゆきバ
○カヤウニ此度此集ガ出来デ 山下水乃 昔ノ撰集ノ跡モ必
絶セズ 玉まの井づ ヨイ哥ガ数多クアツマツタ事ナレバ
いまハおんみ川の瀬ニおゝうらくこ聞えぬさゞれ石
のいはほとなるよろこびのこゝろでおるべき
○モウコレカラハ哥ノ風ノカハルウツカハルキヅカヒモナウテ次
第ニコノ道ノ末長ウ繁昌スルメデタイ事バカリガサア
ニヲウ

あるひすうおとくと
ハるるハしき[illegible]
[illegible]
名のゝ[illegible]と
と[illegible]を
秋の[illegible]
文のあやあり

るれまで須ハ春は花におひすく好くしても
めしき名のゝ秋は秋の手がきさとるこてもぞ
○サテ最モドモガ義ハヨミ哥ハ 春の部 オモシロイトコロモナ
イニ 実デモナイ名バカリ 秋のよそ 上手ナヤウニ云ヒハヤ
サレル事ナレバ
おのがをし入子ある二一舟ノ寺蔭がいとゝしまゝうかぶ
ほるを宰しおやまきるあるべしられとおれと似
たり 関ド甚くの大井川序ゆをかられるくどか
きんの云・と撰ひ集序ふも御きをとらけ奉ハ

人の皆をおもなき

されたることに伊勢がせうそこにも誹諧の色はなく
れ古今の中の時雨にかくこゝとあやまちく
しかし横井也有も今がたのしきといふ文
あるも人はいふもくずれ文字ふすれぶしらの語
あるべし名のつをを美もすべしと思ふて筆
むかし此文の戯あとのく余情ふみ此あまろ
れより形るべしまろくの語とするかならし
まろとふかう名聞きて言ふ用ひる事あれば
此書に書もはいふべきよりあらん

まくらのさうしも
ちかごろとなりて
く言をはあるも
の花やかにすゝみ
文の詞に筆のおも
かくもやさしき
とよめるはかひ
かと、そのまゝを
すなはち文形
のみを女子の
相え
まびく雲とい
言葉とよみぬ
鳴鹿はおきふしと
よみし新あり

世の人のこゝろをしりてこそおのれがちゑ
下ぞく

○世間ノ人ノ聞テトコロモナントヤラウカト存ハレ又一ツニハ手前
ノ自分ノ心モ恥カシケレドモ

たかびくにこれをもちる鹿のおきふしは流るゝき
らがこの冊子おもしろくあれて此書も此時はあ
てるを形すゝよろこびぬる

○拙者ドモガ此世ニ同ジヤウニ生レアハセテノ　カヤウナ作
付ラレタル時節ニ逢フタコトヂヤガ　まなびくものタツテモ居井

テモ「ものの」寂子テモサメテモ悦ビテス

ひとまろあ〜形うあられど、そのものとぶまれる分

○カノ人磨ハトウ無クナツテヤウタケレバ　その道ハノコウ

テヤル　サテ〜雑有イカナ

多ひとまろつとさうたの〜ひとまろ部めき

ふとも

○コレカラ後タトヒ時代ガ段々カツテドヤウニナリユ

クトエテモ

あのこ〜れも〜「あるをや」何とやぎの系さえ

ず松の美ふれちうこせば〜しく〜まさ松のうづう

ぶ〜つ〜ハ〜ものあと久〜〜くさぶまれるば

○此集ガモシ世間ニ「まさのあと」「松のもの」タエソセズニ「まさきのかづら」末エ

長ウ「ものあし」久シウ侍ハツテサヘアリタナラバ　あるをやの

ぼ字ハ必ズ松あをやぎこうまぎれさる選あるべ

し。こ〜ハ若ふ〜久〜〜ぶまれるばといふ

へ〜れる何ぞ。

あのハ中あとも〜ハあとのこころと云〜〜ぶ人ハ

○末代ニ至テ　ものやウヨモヨク知リ　物モ心得テアエウ

ちんとといふ

さて世のこと〜〜

しるの子孫ハ〜〜

て世よとく〜ぶ

末の世ハ美ハ凡

体ニ上旨ハ〜〜

らん人の奈良の

系ハ〜〜の都の

ものもの業撰ハ

ものもの〜〜ぶ

あるハ紀ハ〜〜

さ〜ふ〜もとふ

ハ〜〜ものを

やぎの系ハ〜〜

ふ〜〜〜ものも

雄のやうハ〜〜

ものあ〜ハ〜

人八

大ぞらの月と又なくとくふいあ〜へをわふぎてく紙を
こひざくめうを

○此集ヲ サテ〜結構ナ集デヤ上云テ 天ナ月ヲ見ル
ゴトクニ仰ギ タツトニデ 今此當代ヲシタハスト云フハア
ルマイワサテ 千秋五ハ世ヨリ上ハ代ヲ
すかハち此延喜の代をさすなり

頭書古今和歌集表奏第一

春歌上

ぬるとしふる春こそ来るなる日よりある

左京大夫

年内ニ春ハ来ぬ人ハ年ハ一ツ年ハ二ツ色ニ出ぬ人ハ心ニ春ハ来ぬ

○年内ニ春ガキタワイ コレデハ 同ジ一年 内ヲ 去年上云
タモノデアラウカ ヤツハリ コトレトニタモノデアラウカ
春ハ来ぬ日よりある 紀貫之

渭 油ひぢてぬれぬ水ハ氷ハ水ハ春ハ来ぬ人ハ年ハ一ツ

○袖ヲスラレテスタウタ水ノコホシテアルノ　春ノキタ夕今日ノ
風ガ　フイテトカスデアラウカ　（ん）ヤ

歌　春ノ夜

よさ人しらず

春ノ夜ノやみのよしの山ホ雲ノ春ノ月ノ
春ノ夜ノやみのよしの山ホ雲ノ春ノ月ノ

○春ガキテ　雪ノ消ヘイキ　見レバ吉野山ニハ
ヤダ雪ガフツテ　ナカク春ノケシキハミエヌガ
二條后の春のそのめ花の香
雪ノ内ホ春ハキタレリ鶯の声ノ聞ヘマヤ
○ヤダ雪ノシモツテアル処ヘ　春ガキタワイ　コレデハ鶯ノ氷タ

夕涼モモウトケルデアラウカ（ん）ヤ

歌　春ノ夜

よさ人しらず

掃ノ上ニ春ノ来ルヲ鶯ハ雪ノ内ニ春ハ来ルラン
○梅ノ枝ヘキテ居ル鶯ハヤ雪ケレバ　ヤダ此ヤウニ春デモカ
ケテ雪ガフツテ　春ノヤウニモナイ
鶯ノかけどもハ春ノ雪ケテ　つまぐ雪ノ春ノとつぐ
雪ノ春ノ山ノ雪ノ春ノ

春ノ雪　法師

春ノ雪ハ春ノ雪ケレバ花ノ枝ニ鶯ノ雪ノ春ノ

あるひとのうたふくさき
のおもやきおわいまう
ちぎこのおもと従
くのれど好人の
うたこの歌さまを
とうまくしてんらの
先のよきもの多くあり
バ此位事よ数ざりお
ゆてまよくうくまるん
そこハ能姿のかず
あり語す明言せ
ころ友所ノ下申す

○春ニナツタレバ 花ヂヤト云フテヤラ（やらん） 雪ノフリカカツテアル
木ノ枝ニ鶯ガナク
頭しろく　よき人まうちば
人ざし深くもあそしとかなれバ消ゆへき雪の花とこそ申さん
○トウカラ花ヲモ深ウ思ヒコンデ居ルガソ、ユヱヂヤヤラ（九らん）
シテ春ニナツタレバ ソノママ 雪サヘモタイテ消エノニ
ソノ残ツテアル 木ノ枝ノ雪ガ ハヤ花ニミエル
此哥古く定めまでバ三の句。どうなれかあるべし。どう
なればこそやれさま形り二の語意多くよく多し。然る

すべて前のとハろり
下手筆のふれバよひ
ハ意味の歌すまお
のおそき哥ほいます
ちぎこ三くとさへとく
まていこ子のことよ
こ人へりんともやべ
きいもれ申し

と此集のころふつろうてハ鶯てくさらふ詞ハ耳あ
れぬ方ま鶯ハとさふへ未つまうちやく後の人乃。
うハもれ程とも深くさうしらハ改めよそるふもあ
ふべし。然れども人れバいかくも語上のらむとなけ
あひあろしされバ語を一本まぜ直さることあるも。
後まうけあひ棧のひく改めらるるやゆらん。
ある人のいまくさきのおかまくれおいかうち
ぎこし哥あり
二條后のきさ宮れるやすむ和よきこころ
沙弥僧撰
十しタ

附正月三日おまへよめしてあるやぢあるのひざ

ふりハてうゝふぐゝ雪のうゝらふふりゆゝうゝ

をよもやせみひろふ　ぶんやれやすぶゝ

春の日ハ光りてあるる我ふれど既の雪とあるぞかびき

○此節ノ春ノ日ノ光ノ千ウチ雑有イ小東ヲ業リ〻スル

私デヲリ〻スレバ　年ヨリ〻シテカヤウニ既ガ雪ニナリ

〻スルハザ雅美ニ存ジ〻スル　コヽリ〻シタ物デヲリ〻ス

雪のゆりるを　きのつゝゆ紀

木のの蕾るとき

雪ハ既ごろふちふゆ

忘ま花ちきゆ

ぶちろとあり

ちゝの紙のさまを

はるゝくゝゝ

ろ言あり

○雪ガタツテ木ドモノコノメモ張出ル春ノ合　此ヤウニ雪

ガ消バ花チイ里ニモサ　花ガチルワー　トヽト花上ニエル

春のはゞ冬ふゆる　ふぢゝくれと形ル

春やこゝ冬やまきと雪ちゝハ春ぞふゆ冬ぶゝ春ゆ紀

○ハヤ春ニナツテハバ　モウ花ガ咲サウナ物ガヤ〻ヲダサカスハ

春ノ来タガホドヨリ早イカ　花ノサクノガホドヨリオメカ

鶯万代雪イタラ　ソレデドナラヌヤーニスコトガレレウニサラ

モマア雪サハナカヌーカナ

春ハたゞめのうゝ　こぶの春ぞそね

来きぬと人はいとども梅のあるあるぎりの人あるべきとぞ云ふ

○春ガキタト人ハスケレ尼 ヒダ鶯ガナカヌ ナニテモ鶯ノナカヌウチハイツデモ オレハ春デハアルマイトサメフ

寛平ノ比きさいの宮仕所の合のうた

深草すて

谷風ハ解る氷のハまごとふうちいづる波や春のちろ色

○春ノ初メニ谷ノ風ニアシコヽトケル氷ノヒビクカラウチダス浪ハテウド花ノヤウニ見エルガ コレガ春ノハツ花トスルモデアラウガ

きれとものり

谷の春を風のたよりふくべてぞ鶯さそふあだびよりする

○風ノ便デイツノ幸便ニ花ノ香ヲコヽジテヤツテヤリソレヲ鶯ヲサソヒダシテクル案内者ニハスルボヤ

大江子里

鶯の谷より出る声ふやぱ春ちるとと誘ふ春の風

○谷カラ鳴テ出テクル鶯ノ声ガナクバ 春ノキタトスコウタレガシラウゾ

左京様梁

まそてちるハおどろくびすの浦ぬ春の雪をもぶくまちる谷風の雪とつくくく又雪をあ必くくハこの春ハ雪ところとよめること

すべ

鶯撰方春ハ春ハ谷ちるちるたれる春をおしとあつてちるハ雪ちるくくくれくふやとあきくくまてめでくきあるのり

春ニテ花モ咲モ山里ハ物ノウラミノ音ヲ聞ク

○春ニナツテモ花モナイ山中ノ里デハ ナニモハリヤシガナサニ

鳴ヒモナイ小鳥ノ声ヲシテサ 驚ガナイ。千秋ニ云下句。

聞ものゝ音ことつゝまてゝ

れへゝれるてゝをもゝの軽おゝ

歌しゝず

よゝ人考ゝ成

野ベをく家あゝ世れバ聞の咲ゝて春ハ朝紅ゝ変

○ソレハ野辺ノ近イ和ニスヽヒヲシテ井レバ鶯ガヨウ啼テ

毎日アサカラ来ヽス

春日野ハ焼ヲ若草ノウツマヽニ

○此春日野ヲバ今日ハ焼テクレルナヨ 三妻モ来テアソン

デ居ル 我モキテ遊デ居ルホドニ

ウすゞ野のとゞ火の野ゝ出て見よ今いくらあゝて若草

○此カスガ野ノ飛火野ノ番人ヨ出テヤウスヲ見テクレイソ

千ハコノ野ニ住テ居ルバ タイガイ知ルデアラウガ 一ウイ

クカバカリアツテカラ 若菜ヲツミニハ来ウゾ

こゝ山よハ松の雪ゞふ消るくゝ都ハ野べの若菜つゝミ

○山ニハアレ雪サヘヽダキエズニアシテ 松ナドモ白ウヽミエルニ

京ハヤメツキリト春メイテ 野ベニハ人ガデヽ 若菜コツ

あづさゆみハたちもとつゝく冠辞ニ云
弦をつゞくるまもなくふきくるゝ人なきもの
もして弦のあれバさハぐ也ちしつのあ
さもあゝなびきぬれぐ
ちよ考てふとゝ
おろしのやうにまことに春
バ春ゝく隅なく
らんといふ

君とゝ
へハ友どもハもとよ
りもて天皇と后の
医下をきしたま

ムワイ

梓弓おして春雨ふるふる明るさ人ゝバとろかつゝてん

○ 一 オシテナメテ ドコモカモ 春雨ガマヅ今日フツタガ アスマ
一日フツタナラバ オホカタ若菜ガ出ルニクラ井三ナルデアラ
ウホドニ野ヘ出テ 若菜ヲツミウヅ

仁和の三ゝ御ゝ
ゝ春の野ハ
君ぐゝあ春の野ハ
○ソコモトハ進ゼウト存ジテ 野ヘ出テ此若菜ヲツミ

ゝまつる例あり
ゝ親王の附ゝ
ゝまもバ旅人をも
ゝ物のゝべ

ゝる野ハ春ゝ
ゝの附ゝ
ゝちゝで遊ぶ
ゝきまゝ
人生物日記ゝ
ゝれどゝ
ゝず春の野の
ゝゝ小ゝ
ゝゝ

ガ殊ノ外寒ゝコトデ 袖ヘ雪ガフリカヽツテ サテ〳〵ナン
ギヲ致シテ ワンダ若菜デゴザル
この春れとおゝ
春

ゝ四き

春日野の雪ゝ
○ ワガく春日野ノ若菜ヲツミヤラ アレ白妙ノ袖ヲフ
ツテ ワレダツテ人ガイクワ
お聞ゝ
ゝ人異ゝ

ぬきとハ緯万葉ニ
多し此集にもあり
帯なともよむべく
べき事にこそ語の
意をもてゆくと
てハなしとかゝらう
よせたるをおもふ
るや

題しらず　在原行平朝臣

春のきる霞の衣ぬきをうすみ山風にこそみだるべらなれ

○春ノ着(キ)ル霞ノ衣ハ横ノ糸ガウスサニ 山風ニサヽミダレルデ アラウサウ見エル

寛平御時きさいの宮の歌合によめる

源むねゆき朝臣

ときはなる松の緑も春くれば今ひとしほの色まさりけり

○イツモカハラヌ松ノ青イ色モ 春ガキタレバ 一入(ヒトシホ) 深クヤウ 一色ガマシタワイ

衣をはるさめにいひかけ
たしよりて緑のこ
ろもてふ色によせ
たるよみ也

新撰和歌集ニ糸
よりかくる時しも
ぞとあり

歌たてまつれとおほせられし時よみてたてまつれる

つらゆき

わがせこが衣はるさめふるごとに野べのみどりぞ色まさりける

○[一][衣]ハル雨ノフルタビニ 野ヘンノ草ノ青イ色ガサ ダン／＼増(マス)ワイ

わがせこが詞、おほよろし。まづ丈の衣をはるといふ詞

あり。條材おほやまれり。

青柳のいとよりかくる春しもぞみだれて花の綻(ホコロビ)にける

○糸ヲコツテハホコロビモ スルコトヂヤニ 青イ柳ノ糸ヲ ヨリカケル 春ノコロハ 却而(シマヘ) 花ガ咲ミダレテ ホコロビルワイ

不こうぶるふ、ゑのひゝくをいふ。

要ものゝ中とうれ抑をまゝる

俗正通用

ぬぐり糸よりかけそ玄秀をむすぶもぬるゝ者の抑う

○アレアノ抑ヲ見レバ ウスモエギ色ノ糸ヲヨツテカケテ キレイナ白イ露ヲ一アツ玉ニシテツナイデ サテモ〳〵見事ナ春ノ抑カナ

歌〳〵

篠村ゆろ〳〵

もゝ人まゝず

ゝゝ子者ゝさ人づゝ者人抑で示あゝゝまれゞゝ糸ぞゝゝゝく

百子者ゝさ人〳〵の説あゝゝゝ子へ
ゝ〳〵ゝゝゝゝゝゝゝ
くゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝ〳〵

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ

○鶯ヤナニヤカヤ 鳥ノオモシロウサヘツル春ハ物ゴトニナニモカモ改マッテ アタラシウナルケレド オレガ此身バカリハサ春ノクルタビニダン〳〵トフルウナツテイク

渭陳

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

○アチモコチモ 案内モシラヌ 此山中ニナニヂヤカ呼子鳥ガナイテ人ヲヨブガ ドコヂヤヤフサテ〳〵一アシカリトシレヌ一カナ

北玉

種の声をきゝてあゝ人まゝりゝゝ人をゝひてゝゝ

元の内彩恒

春ハ来れば雁ハ帰るなり雪の白雪ゆきふりてやつくまし

○春ニナツタレバ アレ雁ガカヘルワ 雁ハアヤウニソラヲトンデ北国ヘ
方ヘユクヂヤガコレハヨイトコロデ ユキアフタ コトヅケヲシテヤラ
ウカヨ

ゆくる雁をよそる 伊勢

春霞立てをすてる彩雁ハ帰るきぬ里よ住や彩ゝ所

○オヅケ花ガ咲ヂヤニア 此ヤウニ春ノ霞ノタツタノヲニス
テイヌルアノ雁ハ 花トスモ昔カラ ナイ里ニスミナレタ
カイ ソレデ花ノ面白イコトヲ シラヌデガナアラウ

餘材多きまゝ里の說ころ〳〵

歌考〳〵ず

まろ人〳〵ら

折つれば袖ぞそめける梅の花あるやとこゝに帰れ彩〳〵

○梅ノ枝ヲ折タニヨツテ ソレデ袖ガニホフノデコノアレ コヽニ
梅ノ花ハアリモセヌノニ 此袖ノニホフノヲ 梅ノ花ガコヽニアルト
思フカシテ 鶯ガ来テ鳴ク あやまるころ〳〵

色よりも香こそあはれ誰袖ぞ宿の梅そも

○梅ノ花ハ色モヨイガ 色ヨリ香ガサ ナホヨイワイ アハレヨ
イニホヒヂヤ 此ヤウニヨイニホヒノスルハ タレガ袖ヲフレタ此

庭ノ梅ノ花ゾイ一アル

霜ヲ白く梅の花ゝ多くあちき形く紡人の香ゝあぬおくれぬる

○ムヤクナコギヤニ　庭ノ近イ呼ニ梅ハ立ヲイゾ　花ガサケバ

アヽリヨウ白ウデ　待人ハ来モセヌニ　ソノ人ノ袖ノニホセニト

リチガヘラレルワイ。千秋ニ梅ゝ多くゝ花ハ

あぢきなくとゝ名ぶべゝ

梅の花ゝ多くゝ有ゝ人のゝ衣ゝ香ゝ

○梅ノ花ノ下ヘ千ヨツト立ヨツタト云ホドノコガアツタガ　ソレ

カラ　人ノフレンヲウツヤウニサ　衣モノガ香ニソヽツタワイ

キツイ白ヒナモノギヤ

梅の花枝とりてよろづ

東三條左のおゝいまうちぎみ

梅の花ゝ折くゝぶゝ人老ぬるや　ゆく

春の山ゝ不移てふ梅の花ゝ折くゝぶゝ人老ぬるや　ゆく

○ソウタイ山ハツムリヤカホヲカクス物ナレバ　鶯ガ山ニヌウト

云梅ノ花ヲヌツテノ　吾カ手ヨツタ形ガカクレルカドウギヤト

ツムリヘサシテ見ヤウ

歌ノ心

素性法師

ひさかたの雲ゝ梅の花ゝ有ゝ雲ゝ梅ハ雲ゝ

○オレハアウナ今ゝデハ　梅ノ花ヲタヾヨソニバカリサアハレ見ル

サイヒラ　僧正遍昭よまれる梅を

所ゝ尋ねさまよひてうぐ

ひすのめ山ゝ山ゝ

いとゝの花ゝ山ゝ　これ

よりてよめる

ゝ有ゝ　さて梅

花ゝ折ゝ山ゝ

ひん者ゝ梅ゝ

うゝ　ゝ　ゝ

ナニカナトオフテ見テ居タガ　梅ノ花ノドウモイヘヌ色ヤ香
ハ折テカウ近ウミテノイヂヤワイノ　又ヨソニ見タヤウ
ナノデハナイ　篠斎ノ歌
梅の花とゝまそ人よおりなる
ゝとのり
○此梅の花ヲ半ば折デナウテハ誰ニ見セウゾイ　色デモ香
デモ　ヨウ知テ居ル人ガサ　ヨウシレリニス　ソレテ知ラ
又人ニ見セテハ　ナンノセンモナイフサ

のりとゝまそ人
とよきこゝ人
ら人此梅の花
てゝのなぐくも
おいらぎりくるゝ
うゝ
ゝぶ山とゝそとぶ
ゝきてこハおゝ
とゝ行よりゝ
とゝまくゝきる
ゝとうハゝのあ
やあり

ゝぶ山ゆゝそあるゝ　はゝやき
梅の花朝ハ見ねどゝ夕ぶ山やゝこゝれどゝゝぶ山ゝ
○梅ノ花ノニホウ　春サキノコロハ　暗部山ヲクライ闇ノ夜ニ
コユル時デモ　梅ガサイテアルトミテハ見エネデモソノ匂ヒデ
サヨウシレルワイ
月夜ヨ梅の花をゝてと人のゝひるまずをる
ゝゝね
ゝくゝあるゝ
月夜よハゝれゝゝ見ゝゝば梅の花香をゝゝゝゝゝ人ゝゝる
○ハテヨイトコロヲ一枝折テヤラウトゝブガ　此ヤウ十月夜ニハ月

影ノサス所ガミナオシナベテヤウニ白ウ見エルニヨツテ　梅ノ盛
ガソレギヤトドウモ見分ラレヌ　コレデハ白ヒタツ子テ行ケ
知フウヨリホカハナイ

春のよ梅れ盛とよめる

ちるの惜れ置ハあやぶ梅の盛色とそ見ぬ香やかくるる

○春ノ夜ノ闇ニハモノハワケノタヽヌ物ヂヤナゼトカニ梅
ノ花ガ晴ウテ色コソ見ヱ　香ガカクレルカ　香ハナンボダ
ラウテモ隠レハセヌ　色ガカクレテ香ハカノト子ハ隠レルデノ
モデレ隠レヌデモナイトドチラ尼ワケノタヽヌ闇ヂヤ

あやとハ本ハ織の文のとられてるゆゑを織ことちるをきを文ぶ織ーとこそすりーて物よてるかちおきとそいふこそあれ

あるじの翁ハ人ノ間ノ
ともたづねるいとく
やどらんとハ花ハ
ものふるさとあるまう
よりしるしきを
ものうて對ヘー
あり
花こそ物ものの
くるるりくるれ
りとものーしきを
のの春ーしきを
らハさるくるる
ちーき瓜蓮寺
ものう

こカタ長谷ヘ　一井ノ
もつセよまうづるとまやどりのるる人の都ぶ
名ノ中絶シテ　上ニスズ井ヲ
久しくやさとそ初どつく侍よいまるりのまず
ノヤドハコレヨ　ーリニマノカタノニデアヒカハ
りの都れあるじくくさるるまあむやどりハあ
スミヨリ　ヒトリイフ
るといハのしとは侍り仏れ出ぬるとる多くまを
ものう梅の盛をとまてあく

はるの夢

人ハさんも春ぶ盛ふるさとハ花ぞむかしの香ぞ白ひる
○人ハドウデヤヤラ　心モカハラヌガカハツタカニラヌカ　ナゼニ
ハ梅ノ花ガサワニガ来タレバ　コレ此ヤウニ〳〵カタノイホリノ

白ヒニ アヒカハラズ、ニホウワイノ

水の面ちりに梅の落れさうなるをよめる

伊勢

春ごとに流るる川をせきとめて落ちなば梅やながれざるらん

○流レテイク川ヘ花ノ影ノウツリタル　アノ水ノ中ニモ花ガアルトミテハ一ツノ春デモダニカレテ折ラレモセヌニ　ヨラウトシテハソノ水デ袖ガヌレルガ　今年モヌレルデカナアラウ

詞書よみとあるハ京極殿の屏風にかきたるなり　ちれる池よつぎたるなりあを

この三首うしろの乃ちておりしろるるどふうのちるぐるぐるくるまはおるれりの事ハおろろるなよもそろそれる女ハ中ーてそ

いつかあるべしと白、二三一と白を次第してんぐづ

年をへて花の鏡となる水はちりかかるをやくもりつるん

○年ヲ重ネテ　毎年春ハ花ノ影ガウツリテ　其花ノ鏡ノクモルニスレテアラウカ

二ナル水ハ　花ノチリカヽルヲ鏡ノクモルニスレテアラウカ

花ノチリカヽルニ年ハテ鏡ノ塵ガカヽルトスレバ詞ガ同ジコトデヤ　カウヨミダノデヤゾ

○千秋ちらでとそ　ちらでとそ　ちらでとそ　ちらでとそ　ちらでとそ　ちらでとそ　ちらでとそ　ちらでとそ

ハ　ちらでとそ　ちらでとそ　ちらでとそ　ちらでとそ　ちらでとそ　ちらでとそ　ちらでとそ　ちらでとそ

用ゐきとぐ　ちらでとそ　ちらでとそ　ちらでとそ　ちらでとそ　ちらでとそ　ちらでとそ　ちらでとそ　ちらでとそ

ハ　ちらでとそ　ちらでとそ　ちらでとそ　ちらでとそ　ちらでとそ　ちらでとそ　ちらでとそ　ちらでとそ

そこの　ちらでとそ　ちらでとそ　ちらでとそ　ちらでとそ　ちらでとそ　ちらでとそ　ちらでとそ　ちらでとそ

都よりあり　ちらでとそ　ちらでとそ　ちらでとそ　ちらでとそ　ちらでとそ　ちらでとそ　ちらでとそ　ちらでとそ

梅の落れちるるとよめる

ちらでとそ

ゆれぬ八目とゝまる
こゝとゝろうもく
万葉ハ離の事を
ゝゝしゝゝ
あり

考とう紙ゝ神
ろゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝ

くゝとあくとゝゆれぬあと梅ゝ色ゝろのひまふゝろゝろのぬ らん

○ 日ガクレルトエテハ見 夜ガアケルトエテハ見イレテ ゝバレモ

目モハナサズニ見テ居ルノニ 此梅ノ花ハ イツノトキニ 此ヤウニ

チツテシマウタヤラ

お愛ゝろゝふの読おかゝくゝゝゝゝゝ 千鳥ゝ 此初句ノニ

ゝゝゝゝゝゝ つゝゝとハゝゝゝくゝのゝ

ゝゝゝゝ

ゝゝゝ

真事のゝ用きゝいの言ゝゝ金ゝろゝ

ゝゝゝゝゝゝ

○梅ノ花ヨリ チツタリ花セテハ香ヲナリ花ノコレテオケツレ
ヲ後ニ惜ヒトキ〳〵ノ名ヒダレグサニセウ

人の都ようあるうるう梅の花さきそめてうり
うるとえてあるう　清うやき

ここしよまさ花ありうるむる梅花ちるものふとくあるうぎう南
春ハサク物ヂヤレ　ヲ外ノ梅ニテラウウ　今年カラ始メ
テ知テ　笑イタ此サクラ花ヨ　ドウゾ千九ヒテ　外ノ桜
ニーラハヌガヨーソヨ

歌しらず　よしうあるうむ

山ざくらの人ヒとすきぬ梅花のうく形ひとそ都ヲ人をあきむ
ありのずまこ人ずまこ人ずまこ人

の山毎然れども其の安
あり、陸奥、越後
のかりがね、あること
ふ海をめぐりて
陸奥のとかまり
しあり
ゆむすめの居を
あるたしなアしこの
ものをしるしよりハ見れば
多の老てものの
きたるとしたるとも
よりとも

みつるとうくくあるる　おのおのおきおいすうちぎこ

年ゆれば多ひハ春ハ春ハ春

つと八今も昔ハ
どを字をヨミづと
とのごとく郭山な
どよ出てをこるる
めづらしきあを
伊よてもつきもて
ちろ〳〵

こきまぜハうきま
ぜよ同じ伊セもの
ぐうよこそ〳〵と
もつひ今も船の音を
こきまぜとゝ

「人そのゝやゝよりまゝ桜花をまどゝ折て遊ぶとよせん

○カウシテアノ見事ナ桜花ヲ見テ　人ハタヾ咄スバカリデ
オカウイカイ　ソレデハアルタカヒガナイホドニ　手デニ折テ
来テ　指テイーデ　内ヘミヤゲニセウ
花ざかり小京を見やまゝくよある
ゝ人家ゼビ折ざゝをこまぜて都ぞ春の彩あり乃る

○此山ノ上カラカウ見渡セバ　所ノ青イ色ト　桜ノ花ノ白イ
色トヲコキ一ゼテ　トノト錦ト見エル　此見ワタシタ上ニロ
ノ　京ノケキガサ　春ノ錦上ニモノ　ヤワイ

今の年よあるゞ
苦よさゝゝめどゝ
あれど六拍よ青
あゞゝゝとあをを
とろ秋苦ゞ苦乃
ゝさハゆさゝゝせゝ

さゝゝの花れもとゝ年の老ぬることをおぼ
きてよあろ　きのとことのり
色もろも同じむりゝ小咲らめど年ふる人ぞあゝこまりゝ乃ろ

○桜ハアノヤウニ色モ香モ　イツノ年モ同ラニテ昔ノトホリニ并
クケレモ　年ヲ経テ人ハサコレ此ノホリニ　若イ時ト　ハ大キニ
カハツタワイ　此ノ三句ざゝらめどゝひてハいさゝろ
ゝ多ひがゝきやうあるを　桜をとゝちいまつむしとゝい
あひゝろときこゝ。　千秋三さゝゝめどハゞゞさゝれどゝとゝ
さゝあれどゝゝゝもそハゝゝゝい雖きさゝゝ。
とまゝるさゝゝをよゝるつゝ四き

者ハ小鳥ガ入ル
ヤウナ物ヲモ
くゝめくらかりろ
しわさうもく
ひろく世ヲ知リて
あるこそ名でさ
ル
あ列ハ山といたん
為の冠辞ニあしび
木のしび木ハ繁ミ
木の間ニさて山ハ
きゞくあれど木の
ゆゑをきをめゞルバ
すべく山の冠辞
とゆゑ〜あるん

雅〜ろも忍てわつる老ぶ人ミ云ゆくすゝん山のさゝうを

○此桜ノアツタ山ハ サダメテ霞ガ立テカクレテ知レニクカラウニ
タガアア タンダヘテイテ折テキタコトゾ

この幸れとおゝせゝれ〜附よゝてゝこゝまつまる

桜花さきてよりゝゝゝゝあ引の山れひようれある春〜雪〜

○桜ノ花モサイタサウナワイアア ノ山ノアヒダカラ白イ雲ノ
見ユルノハ

寛平の小射きゝの宮社の会乃こゝ

友の会

ゝゝよりの山づゝ咲ゝる桜花雪ゝとのゝゝぞあやまゝられゝ

○吉野山ノアタリニ咲テアル桜花ヲ見ルバ トシトサ雪ヲ ヤ ヤ
カト トリナガヘラレルワイ

やよひまうゝゝゝ月のあゝるゝゝよゝゝ

いせ

さゝゝ雪春ゝゝれる年だゝゝ人のゝゝあゝまゝやゝゝゝ

○桜花ヨイツモノ年ハ早ウチルトモ セメテ春ノ月加ハツテ
長イ 今年バカリナリ 人心ニタヨウスルホド ユルリト咲
テアツタガヨイニ ナゼイツモトハ違ウ 二ツノ年モ早ウチル

あぐとハいふ〳〵地面をあぐ〳〵ゆくのひ地人をあぐ〳〵人とゐうぐとまそ下ろのとゝあぐ〳〵んまぐぶりぐばといふもやうのかのそん

ゾイ　此結句のてをハ一様に例多〳〵別の型をまぜ
ぞうぐ〳〵　おぞ〳〵ひぐ〳〵あ〳〵ていうゐうとと
るゐとゐうがうし
さてのそれさうよゐ〳〵ぐうゐうゐ人の
きくうゐゐ射よとそる

よく人〳〵ら民

あぐまりと名よこそそれ桜花年よまれるゐ人も結ゐう

○桜花ハアダナ物ヤト　名ニコウタツテアレ　すか〳〵アダナ
モノデハゴザラヌ　一年ノ内ニモタツ〳〵ナラデハ　ゐゐ子テ多多

サレヌ　人ヲサヘ　キドクニ今日ハデチラズニ　待テ居タワイノ　スレヤ
ゐゐ子ニウ　ゐゐ子テモ下サレヌ　ゐ子ニ　アダナ　恐ヨリハ　桜ガハルカニシ
ヂヤ

ゐ〳〵

あるひ〳〵の彩花

ゐゐ子ぞハ　唄ハ　雪ぞ　ゐゐ　消ず　あるゐる　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　や

○　ゐ　熱ハ　桜ハアダニハナイ　葉ヲアダナト云ハレルガ　ソレヤ
大キナチガイヂヤ　ワレガ今日ゐツタバコソ　アノ桜ヲ花ヂヤ
トハ見レ　モレ今日ゐラズハ　明日ハモウ雪ニナツテ降テシマ
ウデアラウ　タトヒソノ雪ニナツタガ　消ズニアツタトテモ　雪デ

ヤトコソ見ヤウケレバ モトノ花トハ見ヤウカヤ

歌しるべ　よろづ人まろぶず

ちるゆゑにこそまことの春ぞ春ぞ春　桜花ハチツテシヒウテカラハナヒボ見タウモラテモ　ソノセンハナ

○桜花ハチツテシヒウテカラハナヒボ見タウモラテモ　ソノセンハナ

イモノヲ　折ルナラ早ウ今日ノ内ニコソ折ウナレ　明日ハモウ手

ルデアラウ

折るとくべきもあるべき桜花いざ見ぬまでハウ今ぞ

○コノ桜ガアリ見事サニ一枝ヲリテミヤウカトモ思ヒド　折テノ

取ルハ　イカニシテモマアノ惜イヤウナ物カナ　サレ〳〵ナントセウ

ゾイヤ〳〵折ルハ惜イ　ドレヤ　柴ノ下デ宿ヲカツ

テ居テ　チルヲ見ヤウ

きのあるとも

桜色ハ衣ハ深くそめてきむ君のたりなん人ぬのくるとも

○花ハオツケ蕊テシヒウテ　アラウソノ後ノ形見ニキル物

ヲ桜イロニコウ染テ着ヤウゾ　千秋ヲ経ルとも色と人

ハ思ふ　ちるとも色のうつるまじ

桜の色のさくらどれはまでできさうなる人ぬ

よろそ　おくるる　うつる

[illegible]

[illegible]

[illegible]